
王族に転生？

悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王族に転生？

【Nコード】

N5216Q

【作者名】

悠

【あらすじ】

テンプレだけど、ちょっとずれたゼロの使い魔の転生物。
オリ主が、チートで動乱の時代を平和に生き抜くのを目的に好き勝手しながら進んでいきます。

プロローグ

うん、テンプレでした。

初めましてが、こんなご挨拶なものには訳があるんです。

神様？が、目の前にいます。

で、間違っ僕を連れてきてしまった。

とうぜん、元の世界には戻れません。

何か希望はないか？希望を聞いてくれるそうです。

前世？の自分はちょっとオタクと言われるような感性をしてましたし、大変嬉しいような気もしないでもない。

しかし、御願いしようにも情報がなさすぎて判断が付きません。

えっ？ゼロの使い魔みたいな世界ですか？

うゝん、武力チートに内政チート、生誕地、歳とか悩みますね。

やっぱり、なにか制限があるのでしょうか？

制限は無いけど、あんまり目立つと苦労するということですか。どうせ苦労するなら権力欲しいな。

決まりました！

メイジとしての才能は水、土、風、火の順番で才能。

トリステイン王家の血筋の生まれで原作主人公達と同年。

内政チート（農業、建築、軍備、育成）出来るくらいの知識。

カリイヌ様に認められる位の対軍、対人問わない武力。

楽器を扱う才能。

配下の貴族を率いるカリスマ。

面白くない？なにを仰るのですか？だって命かかってますから、面白さなんて考えられないですよ。

おまけが付くなら、ルイズのお姉さんカトレアさんでしたっけ？の病を治させて欲しいですけど。

アフターサービスは無いのですね。残念です。ねえ、神様なら自分の中の願望分かりますよね？調整御願いします。

はい、では。

楽しい人生にしてくださいね。

そんな記憶がよぎった、フォルティス・ド・トリステイン5才。

以上ですね。なんだか自分でも厚かましいと感じるのですが、やりたい事があるのに出来ないのは悔しいですから、最大限チートさせて下さい。

アン姉様と私？（前書き）

今回は、ちょっとアンチ？入るかもしれませんが。
人物紹介の回ですので、飛ばしても影響ないかもしれないです。

アン姉様と私？

おはようございます。

フォルティスです。

只今、自分のベットで目が覚めましたが、なんだかお腹のあたりに重さを感じます。

何だろう？と思い、掛け布団を捲るとアン姉様が手を投げ出して寝てらっしゃいますねえ。

「アン姉様、朝ですよ！起きて下さい」

優しい言葉と共に揺すって差し上げますが…起きません。

ちよっと、ここで整理してみましようか。

私こと、フォルティス・ド・トリステイン5才。

ハルケギニアのトリステイン王国の第二王女です。

神様？とお話した記憶があるという位のちよっと他人からしたらイタイ感じの…

勿論、前世？の記憶がある事はあるのですが、その内容が…おおよそ女の子らしからぬ物ばかりです。

前世？の自分、何故にファッションとか興味無かったの？と小一時間問い詰めたいのですが。

この世界が「ゼロの使い魔」と分かった瞬間、まず自分の名前にびっくりして、一緒に居た姉らしき人物の顔を確認してしまいました。そう、あの姫君なんです！アンリエッタ姫！二次創作なんかで地雷姫、アホリエッタ、アンポンリエッタ等と言われやすい方ですよ。私は、そんな姫の妹なんです！なんだか地味に政略結婚や苦勞フラグが立ったような感じがしました！

でも、一歳年上の姉はかわいいのです。ぱっちりとした目とか…。その顔にそっくりな顔立ですから鏡を見た瞬間「私！かわいい！」とか思っただけで表情を作ってしまったのは悪くないはずですよ…。だって女

の子ですから。

こほん…話しが脱線しました。

しかし、そろそろメイドさんが起こしにくる頃ですね。

本気でアン姉様をおこしましょうか！

「アン姉様、朝ですよ！起きて下さい」

あつ！なんだか、そろそろ起きて下さるみたいですね。

「おはよう〜フォルがあつたかいからよく寝れました」そんな事を言いながら姉様が伸びをなさってます。そんな仕草すら、かわいいのです！私のかわいい大好き回路が刺激されます。でも姉様？私とそんなに歳は変わらないのですから、子ども体温だとしてもそんなに変わりませんよ？

「おはようございます。姉様」

につこりと笑顔を挨拶をかえしてしまいます。が同時に、何で私のベットに姉様が寝てらっしゃるのか疑問が生まれます。

「フォル？どうしましたか？」

どうしたの？そんなに不思議そうな顔をしたのでしょうか？

「なんで、私のベットで姉様がいらっしゃるのか考えてました」

そろそろ、本当にメイドさんが来そうですね。

「そんな！フォルは私と一緒に寝るのが嫌なのですか？」

姉様、そんなに大袈裟に言わなくても良い様な気がします…

「そんな事はありませんが、確か別々に寝ましたよね？ただ、それだけです」

昨日の夜は、姉様に「おやすみなさい」の挨拶をして私は先に寝たはずなのに…

そんな、やりとりをしている内にメイドさんが来てしまいました。

「おはようございます。フォルティス様…アンリエッタ様…こちらにいらっしゃいましたか。只今お召し物をお持ちしますね。少々お

待ち下さい」

優秀なメイドさんが居ると助かります。

あれよ、それよと着替えさせられて、鏡台：ドレッサーの前に座らさせられて髪が整えられていきます。

なんて言うのでしょうか？夢見心地の心境ですね、この瞬間は。女の子なら誰だって憧れるはず。

髪を自分ですると、他人にされるのでは、美容院で髪を洗われるのと理容室で髪を洗われるくらい気持ち良さが違います。幸せななんてトリップしてしまっても仕方ないですよ？

そんな幸せな時間が終わると、身支度も整え終わります。

姉様の方を見ると其方も終わったようですから、食堂に出陣です。

フォルは、今日も一日頑張ります！

アン姉様と私？（後書き）

（作者の主張）

シャンプーは美容院の方が床屋（理容室）より気持ち良いとおもつ。

私とお茶とマフィン。

私とお姫様な一日？

メイドさんに連れられて食堂に向かっているフォルティスです。

やっと付きました。どれだけ広いのでしょうか？これでは、鬼ごっこすると一日じゃ終わりそうにありません。ただ、かけっこは不自由なく出来そうですが…脱走には計画を練る必要がありそうな感じ。

「おはようございます、母上」

やっぱり朝は挨拶からですね？

「おはよう。アンリエッタにフォルティス。さあ、席に付きなさい」
母上に促されて席に付きます。

朝から焼きたてのパンにふわふわのオムレツ、新鮮な野菜類…シンブルだけに、贅沢な感じが嬉しいです。

さて、食後の紅茶も楽しみましたし、部屋に戻りながら今日の予定を聞いてみます。

「プレセアさん、今日は何のお勉強をするのですか？」

先程から、私のお世話をメインにしてくださいさるメイドさんは、プレセアさんです。歳は15で、わたしが産まれたときにお城に来たそうです。

「今日のお勉強はお休みになっております。お昼までは御自由になさってください。お客様がいらっしゃるので、お部屋の中でお願

します」

プレセアさんは、淀みなく私の予定を言っていきます。

「お客様ですか？初めてですね。私に会いにくるのですか？どんな方でしょうか」

幼い事もあり、今までお客様は私には来ませんでした。

ひょっとして、ルイズ来訪イベントでしょうかね。楽しみです！

だって、見た目は超絶美少女（今は美少女？）ですよ。性格はツンデレで、それ以外にも難はあるのかも知れませんが…絶対に仲良くなりたいです！

仲良くなったら、性格も変わるかもしれないし…それに、家族の話をすればカトレアさんに会いにいけるかも知れませんが。神様に貰ったチート能力を使えるかもしれない。でも確か杖契約してません…どうでしょう？ゆっくり考えましょう。

さて、部屋に着きました。

机に向かってこれからやるべきことを書き出してみしましょう。

まずは、杖契約。これをしないと話は始まりません…誕生日をめぐって母上にオネダリしてみましよう。それからカトレアさんの治療を考えましよう…場合によっては、姉様のお力も考えなくてはいいのですからね。

先程から、母上と姉様の話は出て来ますが父上（国王？）の影もありません。でもいままでの記憶で居なくなつたと言う事はありません。

もし、居ない場合は母上に「生きるものの為に国を導く気があるのか」聞かなくてはなりませんし…それ次第では…色々動かなくなら

なければなりません。

どちらにせよ、味方を作らなくてはなりません。それも姉様と相談しながらですし。なんだか一筋縄に行きそうにないですよ。

はあ…憂鬱だ。フォルティスの憂鬱なんちゃって。

ふと、部屋を見渡せば前世ではありえない位豪華な私の部屋。この机一つ取っても支えてくれる人がいるから使える。だから、真剣に考えなくちゃ…

「フォルティス様？お茶を御用意しましょうか？」

深く思考の海に沈んでいた私をプレセアさんが引き揚げる。考えていたら頭が疲れました。

「お願いします。出来れば甘い物も…」

そういった私にプレセアさんは、そつなく用意してくれます。

「先程から、難しい顔なさってましたが…どうかなされましたか？」
紅茶とマフィンをだしながら聞かれた事に、すぐ答えられず…お茶を一口飲んで落ち着きます。

「ただ、今からいらっしゃるお客様を考えてたのですが、そんな顔してましたか？」

イケナイ…五歳らしく振る舞わなくっちゃ。

「お客様がお着きになりましたら、お知らせしますから、ゆっくりなさってください。」

そう言いながら、プレセアさんは部屋の隅へと控えました。

もうすぐお昼です。台図があつたようなので、移動しましょうか。

移動先は、応接室です。

かなりドキドキします…

「大丈夫ですよ。アンリエッタさまもいらつしやいますから」
プレセアさんが察したのか、声をかけてくれます。

さて私のお客様は、誰なのでしょう。

お客様来訪。

お客様と私。

私の初めてのお客様が、目の前にいらっしやいます。

「初めまして、フォルティス様。ラ・ヴァリエールの二女カトレアでございます。本日は、お時間を頂き有難うございます」

はい、予想の斜め上に来ました。しかし、ここで惚けていては王女の名折れ！今後の為にも、しっかり挨拶しましょう。

「カトレア様、若輩者に丁寧な挨拶ありがとうございます。フォルティスです」

来ていただいた…と言う事は、こちらがホストですね。ですが初めての事なので、何をしたら良いか判りません。

「お二方どうぞ、お座りください。今、お飲み物を用意致しますので御希望はございますか？」

プレセアさんの気を利かせてくれたおかげで、なんとか先に進むことができました。

うーん、カトレアさんを見てみると本当にほのぼのとしますね。ふわふわのピンクの髪に柔らかい表情…だけど、どこか油断出来ない視線…前世の知識の

せいだと思いたいのですけど。

「本当にアンリエッタさまとソックリでらっしゃるんですね。でもなにか深い所が違う感じもしますね」

ああ、この人は鋭いです。しかし元氣そうに見えますが大丈夫でしょうか。

「姉妹でも違うのは、カトレア様の方がご存じじゃありませんか？確かに歳は離れていらっしやいますけど。ところで、お身体の具合

があまりよろしくないとお伺いしましたが、本日はよろしいのですか？」

悩んでも仕方ないのでズバリ聞いてみました。

「そうですね。フォルティス様と同じ歳の妹ルイズというのがありますが、確かに違いますね。体調は、良いですよ…お気遣いありがとうございます」

初対面にも関わらず、聞きたいことを聞く私にも柔らかい笑顔をくださるカトレアさん…お手本にしたい人ですね。

その後は、動物のこと等を話してお昼になりました。ちなみにルイズは留守番だと聞きました。

楽しい時間もすぎて…夕方です。

「今日は楽しかったです、今度は其方の方に行きます。ルイズさんや動物たちにも会いたいのです」

これでラ・ヴァリエール行く事のフラグを立てます。

「ええ、是非いらして下さいね。かわいい子が沢山待ってますから」そう言っカトレアさんは帰っていきました。

でも、今日は一人だったのでしょうか？考えても仕方ないことですけれど。

お客様来訪。（後書き）

カトレア様初登場の回でした。

しかし、フォルティスは五歳らしからぬなあ。
難しい…

お客様来訪：その後（前書き）

お気に入り登録、評価して下さいの方ありがとうございます。

ゆるゆる進むこの小説を今後ともよろしく願います。

お客様来訪…その後

お客様来訪…その後。

こんばんは、フォルティスです。

只今、姉様と一緒に母上の寝室にいます。今日は三人揃って入浴しました。豪華で広い浴室や良い香りのするお湯に感動して、メイドさん達に体を洗われて恐縮したりしましたが…印象に残っているのは、母上の刺すような視線でしょう。

その母上は、化粧水みたいのを使って一生懸命に肌のお手入れをなさってます。前から子供が二人いるとは思えない程若々しい肌をしているな…とは思っていたのですが…ファンタジーでも、日々のケアが大事と言う事なのでしょうが？

「フォル？どうしたの。私の顔になにかついてるかしら？」

あまりにも、真剣に見つめすぎたのでしょうか？怪訝そうな顔をしていますね。

「母上は、顔に何をしてるのですか？」

水の秘薬を使っているのは分かっているのですが、魔法を教えるために、疑問をぶつけます。

「肌を綺麗にする為の水の秘薬を塗ってるの。まだフォルには…必要な物よ」

母上…笑顔がすばらしいですが、声も目も笑ってませんよ。鏡ごしに見ているのですが、あまりの迫力に、今迄大人しくしていたアン姉様も、ビクツ！としています。

（何時の時代も、美容に関しては地雷が多いのね。娘の肌に嫉妬する母親…聞いた事はあるけど本当だったとは。）

正直、その領域に達したことない身としては、やれやれ…な感じなのですが、「若いからって、油断していると後が大変なのよ。」と目の前に来て私の頬をつねりながら、夜叉の様な表情をする母上を前

には、表情に出すわけにもいかず：「ゴメンナサイ、ハハウエ」と痛みを堪え涙目で謝るしかないのです。

「母上。水の秘薬とはなんですか？もし私にも創れるのなら教えて下さい」

気を取り直して、魔法フラグを建てるための質問です。

「うゝん… フォルには… まだ早い様な感じがするけど… そろそろアに魔法を教えようと思っていたから、二人一緒でも良いわね。」

あのゝ母上？お願いしておきながら、なんですが… そんな簡単に了承していいのですか？さすがに一秒じゃないけど…

「でも、杖を用意するのに時間が掛かるから、まだお預けね」

残念ですが、しかたありませんね。

ところで、肝心の姉様ですが、不気味な位静かです。妹が母上から折檻？を受けているのですから、姉として庇ってくれても良いのに… 恨みを込めてチラツと視線を向ければ、絵本を読んでいます。私も読んだことがある本ですが、どうにもならないとしか感じないです。毒にも薬にもならない… ただ、勇者がお姫様を助け出す工程を書いただけ…

姫君が攫われたら、どこからともなく勇者と三人の仲間が現われて悪い巫人を倒して、偶然改心した巫人を仲間にして武器を提供されて… 悪の親玉を倒して、平和に成りました。

というだけの、どこの王道ロープレだよと言いたい… 内容。子ども向けなら、根性、努力、涙、希望位は入れようね。

夢中になって本を見ている姉様を横目に、我ながら擦れてるなあと思うのでした。

どうやら今日は、母上の中で三人一緒に寝る事が決まってるみたい

です。

私を真ん中に…それでは、お休みなさい。

お客様来訪…その後（後書き）

やっと一日が終わった…

私とお姫様のお勉強（前書き）

（注意）

今回は、フィクションの中の一文とは言えど不愉快になる方がいらっしゃる可能性があります。なにとぞ、お気をつけください。
ゆるゆる進む小説をお楽しみ下さい。

私とお姫様のお勉強

私とお姫様のお勉強。

たのしいな♪たのしいな♪

只今、大絶賛、自室にて座学をしているのに、ハイテンションなフォルティスでございます。

母上と魔法を教えて頂く事を約束した後なのですが、取りあえず、色々とお勉強することになりました。勿論、読み書きはもう大体習得しました。漢字みたいに文字数は多くないし。ただ単語となると解らない部分もありますが、今の所は問題ありません。

お勉強の内容なんですけど…スルスルと頭の中に入ってきます！まだ頭が柔らかいだけなのかな？それとも神様がくれたチート能力のおかげ？分かりませんが、とにかく楽しい！解るとは楽しいですね。前世での勉強嫌いは自分で作り出していたみたいです。

お勉強の一例を紹介すると！

王国史のお時間。ある程度まで進んだのですが、なんともまあ平坦な歴史ですね。さすが6000年近くも続いているだけはあるって感じでしょうかね？ただ、私が習っているのは、綺麗な王国歴史でしょう。謀反とか独立とか戦争という文字がありませんから。ただ有名な建物ができた年代が書き綴られているだけです。あっクルデンホフル大公国独立は、書いてあるんですよ。技術関連があんまり書いてない…まあ、王家からしたら些末な事だと判断されたのも知

れませんが。

次は、王室史です。

これは家系図と睨めっこしながら年代をつきあわせて行く感じです。あつ、カトレアさん達の家と私達の家が別れたのは凄い昔なんだねえ。

それにしても王家に連なる人間少ないよね。この家系図が正しく書かれ続けられているかは解らない部分もありますが。

それと、諸侯から献上された貴重品のリストを見るのもお勉強です。あつ年代不明だけど、始祖の祈祷書とかある。そのうち宝物庫を見せて貰いましょう。勿論、それ以外も見たいです！光り物とか！女の子ですから大好きですよ。

他にもあるのですが…主な座学はこんな感じです。

テーブルマナーにダンス等の作法系は前世では、あまりと言うか全くと云って良い程、縁が無いジャンルでした。勿論、教えてくださる方たちは、一流の中から色々な意味で選ばれたのでしよう、上手に教えて下さいました。でも、あまりにも教える事に特化し過ぎていて、面白さが感じられませんでした。

これらの成果が見えるのは、何時になるのでしょうか？褒められる事になれば感じるかもしれません。

このお城には沢山の本があります。図書館とはいきませんが、図書室といっても良いくらいはあります。なので週に一度位は一日集中力が切れるまで居る事があります（食事や、おやつの時間はしっかりとって居ますが）

そのなかでも、お城とか、各地の特産物の資料は大好きです！なんだかロマンを感じるのです！

お勉強大好き！な、私ですが…当然苦手な物もあります。
それは、ブリミル教の司祭のお話しです…内容が苦手です。
だって、ブリミル様が最高！が根底にあるお話ですからね。なんて
言うか前世で感じた宗教に対する拒絶の意思が出てしまいそうにな
ります。まあ、友だちの心を壊されたという経験があるからなので
しょうね…今の私の第二王女という地位はブリミル様が居たからこ
そののですが…悩ましいです。取りあえず過不足がない程度には、
こなしましょう。

これがここ最近の私のお勉強内容です。早く杖こないかな？

私とお姫様のお勉強（後書き）

いかがでしたでしょうか？軽くアンチだよなと思いながら何度も書き直しました。これくらいのアンチなら許容範囲ですよね？
ブリミル教をざっくりと表現したつもりです。

私と姉様。杖契約。（前書き）

今回は、ネタが入りました。

私と姉様。杖契約。

私と姉様。杖の契約。

予想の斜め上行かないで！想定範囲内でお願いします！神様のバカ！昔の私のバカ！怨んでやる！

昔の私をおもいツきり殴りつけたい…フォルティスです。

念願叶い、杖が届けられたのですが…見た瞬間固まってしまいました。

大人っぽくてシンプルな感じとお願いしたつもりだったんだけどなあ。

形状と色が…まんま！封印を解かれて実体化したカードを封印、収集する小学生が第一期で使ってた解放状態の、それなんです。

…誰かケロちゃん連れて来い！今すぐだ！十年後なんて言わずにそうしたら使ってやる！と叫びそうになった、私は決して悪くないと思うんだ…うん。神様よ…私の髪の色は、撮影者の方だぞつと…。

ええ、母上が朝から機嫌良さそうに満面の笑顔を浮かべて「昨日、アンとフォルの杖が届けられたの。ご飯の後にわたすから、私の部屋にきてね。すっごい素敵な杖で…私が使いたくなっちゃった」とか言うから何か有るなどは、考えたけど。

姉様の方を恐る恐る観ると、形は一緒なのですが…ダークな2Pカラーといった感じでしょうか？なんですか？スッピでも来るのでしょうか？

神様よ！魔法少女は確かに憧れたが…まさか、札捕獲者だとは…しばらく復活できそうにありません。

「母上…これは、何で出来ているのでしょうか？それに、こんな形の杖見た事が無いです」

姉様がショックを受ける事なく（当たり前ですね。）質問を繰り出します。

「これは、我が王家に昔から伝わる杖です。二人の王女が生まれた時に渡せという、言い伝えと共に。いままでに無い形の杖ですから、ブリミル教は、マザリー二を通して確認した所問題はないそうです。さあ！契約をしてみてください。」

なる程、だから時間が掛かったのかあ。いかにも、ワクワクしてます！という顔をした母上に逆らえず杖を握ります。

「それじゃあ、杖さんに使わせて下さい。お願いします。思いながら、しばらく持つて下さい。ただ、ちゃんと勉強もしなくちゃ駄目よ。多分一週間位掛かるからね」

母上に御礼を姉上と一緒に言って自分の部屋に戻ります。

かわいい杖だね。とか言いながら…確かにかわいいです。でもね、御先祖様のセンスを一瞬疑いました。

はっ！まさか制作者が御先祖様とか言わないですよ。後で時間ができたら調べてみましょう。

自分の部屋に戻ると同時に、疲れを感じてベッドに座り込みます。母上に言われた通り、つえにお願いするように眺めたり力を入れたりするのでした。

それから、杖と契約出来るまでの5日間は、姉上与顔を合わせる度に、契約出来た？と聞き合っていました。

そして、杖を受け取ってから5日目の夕方でした。

ふと、杖を握って力を込めたら…今までと感覚が違いました。いきなりペンダント位の大きさになりました。つい（ほええええええええ！）と心で叫んでしまいました。

まさか、戻す時はあのフリーズを叫ばなくてはならないのでしょうか？恥ずかしいです。

手のひらに乗せて居ると、なんだか使い方が、頭の中に浮かんできました。

「リリース（封印解除）！」

という言葉と一緒に精神力？魔力？を流すと、大きくなるようです。大きさも精神力？で調整可能です。小さくなれと思うと小さくなってくれます。なんと便利なのでしょう！ああ良かった、長い呪文を唱えなくて済みました。

さて、プレセアさんを連れて母上の所に報告に行きましょうか！

なんだか嬉しくて、意気揚々と廊下を歩いていると後ろから姉様の声がします。

「フォルも母上の所にいくの？一緒に行こう」
断る理由は、ありません。ならんで行きます。

そういえば、姉様にも専属のメイドさんが居ます。いま姉様の後ろに居るシエラさんがそうです。プレセアさんの双子の姉で最初みた時は、どちらがどちらか見分ける事が出来ずに混乱したものでしたが…ちよつと勝ち気な目をした方がプレセアさんで、垂れ目で優し

そうなのがシエラさんです。こんな時、自分たち姉妹はまわりに凄く気を使ってもらっている幸せ者だと感じます。偶然かもしれないのですが、そんな簡単にこんな事は無いとおもうのです。

あれ？姉様、杖持っていないです。

「なんだか、今までと違う感覚がしたら突然小ぢやかくなっちゃった。で、手に載せていたら使い方が頭の中で浮かんできたの。だから契約出来たのかな？と思って。フォルモなの？」

あらま、そんな所まで一緒なんですね。

さて、母上に報告しましょう！

結果からいくと、母上は契約出来た事を報告すると、とてもよろこんでくれて、私も嬉しくなります。明日から魔法の先生が来る手配をさせてました。

でも、母上？邪魔にならないからって、この杖を欲しそうに見るのやめましようね？大人が持つと…とても痛々しい感じがしますからフォルは、将来が怖いです。

私と姉様。杖契約。（後書き）

作者の百合好きの原点ねたを入れました。分かる人居るよね。

魔法と姉妹喧嘩と仲直り？（前書き）

フォルティスのメイジへの第一歩ですが…
なんだか、とんでもない方向に魔法を使います。
でも、誰かは絶対にやってるはずだと確信してます。

魔法と姉妹喧嘩と仲直り？

魔法と姉妹喧嘩と仲直り？

おはようございます。フォルです。杖の契約が出来た日の夕食は、とても豪華でした。

「うー」

今は、姉様と一緒に魔法の授業？を受けてます。なんで唸っているかというところ…コモンマジックのレビテーション（浮遊）が上手く出来ないので。

先生は、キャロルさんといまして、オートザム家の二女なんだそうです。魔法学校を主席で卒業された、とっても優秀な方だとプレセアさんが言っていました。

先生が言うには、対象に力をゆつくりと通す感じだそうです…上手に浮きません。

ちなみに姉様は、習って直ぐに成功させました。なんだか悔しいですね。あつ姉様がこっちを見て得意気な顔をしています。

なにかコツみたいのが、あるはずですよ。確か魔法の発動力？は、精神的だったはずですよ。ならば、想像がキーになる筈！

目を閉じて、私の目の前に…対象が…浮かんでいるのを思いうかべて…えい！

「レビテーション！（浮）」

どうですか！目を開けると…

「きゃあゝ??」

そこには、姉様が浮かんでいました。あれ?なんで?

「フォル!早く降ろして!」

ジタバタしている姉様...とってもかわいいです!しかも、杖がファンシーな感じですから、魅力が増してますね。

「姉様、かわいいです」

つい、口に出しちゃいました。

「分かってるから、早く降ろしなさい!」

あつ、姉様涙目になってます。

えゝと、浮かす工程の逆をやれば良いのですから...ゆっくりと力を絞っていきます。

姉様は、無事?着地しましたね。

「ふう、良い仕事しました」

なんだか、とつても満足感に包まれます。精神力は、減った感じがしないで...

「いふあい!ねえしゃま、ちゅねらにやいでくだふあい」

うゝ、姉様おもいつきり抓りましたね。もう一回レベテーション掛けて差し上げます。

「もう許しません!フォル」

遠ざけられた姉様が、レベテーションを花瓶に掛けて、私に向かって飛ばしてきました。

「姉様が、頬つぺた抓るのが悪いのだと思いますよ。」

飛んできた花瓶を交わして、姉様の近くの椅子を飛ばして、目の前

を掠めさせます。怪我をさせる気はありません、ええ勿論。

でも、こうなるとお互い全力全開でやるのが子供クオリティ。精神力が尽きそうになったら魔法を捨てて、己が肉体でお話しを始めます。

途中で、先生やメイドさん達が止めようと思いますが、姉様も私もヒートアップしてますので、当然！姉様権限発動でねじ伏せます。

（後から思ったのですが、これがある意味初めてのチート発動かもしれないです。発動したのは、権力と魔法と武力でしょう。だって、子供の一年の差は大きいです。私が普通に姉様と張り合える筈が、ありません）

お互いに体力が尽きそうになってきた時、ふと私の体が浮かんて姉様から離れていくを感じました。姉様自体も遠ざかってます。

ジタバタ逆らおうとしますが、無理でした。

「アンリエッタちゃん、フォルティスちゃん？何をしているの？そんなにまだ遊びたいのなら、私達も入れてね。」

乱入者は、母上でした。ああ素敵な笑顔です。

あれ？でも…魔法は、一人ひとつしか発動しないはず。同時には出来ないはずです。

母上の後ろには、ピンク色の髪のおばさまがいらっしやいますか…ひょっとして、リアルチートキャラ…若しくはバグキャラの、カリ―又様ですか？なんだかニコニコして、こっちを見てますね。

それも気になりますが、母上を宥めなくてはならないです。

「二人共、こっちに来て座りなさい。どうして、こうなったのか説明しなさいね」

この母上には逆らえないので、姉様と大人しく説明を始めます。が…どちらが仕掛けたのかと言う所で食い違いが発生します。

「どちらも悪いのだから、お互いにゴメンなさいしなさい。ここの掃除はメイドたちにさせますが、ちゃんと御礼を言いに行くことね。杖を暫く預かります。」

やっぱりといった所でしょうか？喧嘩両成敗になりました。

私はある意味スッキリしたので、姉様に素直に謝ります！ついでにハグ付きで。

こうすれば姉様は、謝らざるを得ないですし…姉としてのプライドをくすぐられて。

仲直りの証として、今日は一緒に寝る事にします。

「よく出来ました。そうそう、今日はお客様がきてるのよ。ヴァリエール公爵婦人にご挨拶なさい」

母上に褒められるのは、嬉しいですね。

「初めまして。アンリエッタ・ド・トリステインです。」

「初めまして。フォルティス・ド・トリステインです。」

「ありがとうございます。お二人の闘いを見せて頂きましたが、どちらも素晴らしいですね。将来が楽しみです、妹姫様の方が特に」
「カリーヌ様の笑顔は、素晴らしいのですが。」

何か地味に死亡フラグを建てた様な気がします…

魔法と姉妹喧嘩と仲直り？（後書き）

前書きに書いた通りなのですが…兄弟姉妹もので、実力行使を伴うシーンを見た事がないなと思い、書きました。

レビティションだけで喧嘩しようとしたら出来ると思っんだ。

私と姉様の魔法の翼と属性

私と姉様の魔法の翼と属性。

二週間ぶりに杖を手にしてご機嫌なフォルティスです。

あの日の死亡フラグは、無事回避出来たのでしょうか？先延ばしになっただけの様な…

なんだか長い事手にしてなかったのですが…改めて見ると派手な杖ですね。

この二週間は、メイドさん達に謝りに行ったり、姉様と相談して一緒に勉強したりしてました。

で、気がついたのですが…姉様とやっている事が同じなんですよね。母上が何を考えているか分からなくなりました…今度聞いて見ましよう。

レビテーションを使つての姉妹喧嘩をしてしまいましたから、あれ以来の魔法の授業です。

「この前は、大暴れしてゴメンなさい！キャロル先生」
姉様と一緒に、まず謝る事から入ります。

こうしないと、私たちがワガママな姫様だという事が広まってしまうかもしれないです…人の口には戸は建てられない…ですから。

さて今日の授業は、ロック（施錠）とアンロック（解錠）、ディテクト（解析）マジックの授業です。

今、目の前にある箱が教材なのですが…継目と鍵穴が解りません。これを開けてから、また閉めるのがお題になります。

じゃあ、全体にディテクト掛けないで、アンロック掛ければ良いだけの話ではないかと…思うのですが、これは授業ですからズルは出来ません。

頑張ってみた所、今日は姉様と同時でした。で、この箱はオルゴールでした。聴いた事の無いメロディでしたが、これは嬉しいプレゼントでした。

今日の授業は、ここまでです。

それにしても、母上は何のメイジなんでしょうか？これも聞いておきたい事の一つです。

後日、いろんな疑問をぶつけてみた所、なんと言うか困るような回答ばかりが返ってきました。母上は、水メイジでした。姉様のお勉強は…私が興味ありそうだったから一年早めたそうです。

意外とアバウトな母上でした。

えゝついに来てしまいました、フライを習う時間なんですが…楽しみのような、楽しみじゃないような…複雑な気持ちです。

まさかとは思うのですが、杖に飾られた羽みたいなのが大きくなりすぎませんか？この杖を持って約一ヶ月、悩んでました。でも、ペガサスみたいに大きな翼は、この世界で認められているみたいだけど…二つ名が怖いです。

しかし、その悩みに別れを告げる時が来ました。

いざ、行かん！

「フライ（飛翔）！」

おっおお！体が浮きました。どうやら杖で飛ぶようですね…杖に横座りしましょうか。跨るのは、このドレスじゃ無理ですし。レビティシヨンの経験が生きているのでしょうか？上手くコントロールできています。

大きくなった杖の先には、やっぱり…ありました、白い翼が。勿論、姉様も一緒なのですが…戸惑うかと思いましたが、意外と戸惑ってませんね。

でも、かわいいから良し！とします。人間開き治りが大事ですよ、きつと…

フライが、簡単に成功しましたので、このまま属性を調べる事になりました。

外に出なくちゃいけないのですが…フライを使うのですね？

高い所からの滑空は、気持ち良いですね！横を見れば姉様が並んです。顔を見て笑い合ったのは、しょうがないとおもいます。

目的地の広場に着きましたが…なんで母上がいるのです？

「自分の娘の得意な属性を調べると聞いたら、見ないわけにはいかないでしょう？」

母上がご機嫌なのは、良いですが…緊張します。

的に向かって、火、水、風、土の順番で魔法を打ち出せばよいのですね。

結果として、私と姉様は水、土に適正が強いみたいです。

ただ気になるのは…姉様と水の魔法を使うタイミングが一回被ったのですが、精神力が多く出た感じがしました。要検討ですね。

これで、ファンタジーの象徴たりえる錬金をしたり、母上と約束した水の秘薬作りをする為の第一歩を踏みだしました。

夢は広がります。

私と姉様の魔法の翼と属性（後書き）

ところで、マリアンヌ（アンリエッタ母）は、何メイジなんだろう？
都合上、水メイジにしたのですが…分かる方居ますか？

私の食文化の考察と野望と魔法の練習。(前書き)

なんとか十話にたどり着けました。
みなさまのおかげでございます。

ゆるゆる進む、この小説、おつき合ってください。

私の食文化の考察と野望と魔法の練習。

私の食文化の考察と野望と魔法の練習。

只今、木漏れ日と風が気持ち良い木陰で、優雅にお茶をたのしんでいる典型的なお姫様をしているフォルです。

ただし…BGMは、主に剣戟の音です。偶に爆発音なんかもありますね。

今日のお茶は、紅茶ではなく緑茶です。小麦粉と砂糖じゃなくて、小豆と黒砂糖の甘さがこいしくなりますね…もう何年食べてないのでしょうか。

日々の食生活は、恵まれているとは思っていますが、油脂分が多過ぎるのです。

お肉料理に関しては、仕方ない部分がありますが…たまには、サツパリとした茹でて脂を落としたものが食べたいです。

後は、匂いがきついのがあるのも参りました。姉様がお気に入りの山羊のスープは、野菜でごまかしているとは思っていますが、まだ野性味溢れ出る味で最初の時に、リタイアしました。今でも苦手ですが、8日に一度は出てきます…姉様が私に喧嘩を売っているとは思えないです！高くつきますよ？姉様。

そんな姉様とは逆に、私のお気に入りは、鶏のグリルです。

皮はパリパリだし身はジューシーですし。

お肉は、中世ヨーロッパらしく塩漬けになっている物が目立つのも特徴です。でも、子どものサラダに生ハムはやり過ぎじゃないかと思えます。

次はお魚料理なのですが…悲しい事に川魚が中心なんです。

したがって調理法がムニエル、煮込み、スモークなんです。

スモークで刺身に近いのが食べられるとはいえど…大好きな白身のムニエルは、そうそうでてきません。茹でる、塩焼き、一夜干しを焼くのは、無いみたいで、とても食べたいです。後は、海老蟹蛸が食べたいですが、一部は絶望的です。

お野菜なのですが…緑色の野菜が全体的に少ないです。トマト、タマネギ、ジャガイモは豊富ですが…トマトスープにトマトサラダはやり過ぎだともいます。ハーブは沢山あるので、香りのバリエーションは豊かです。

あと、茸の類いも豊富です！名前は分からないのですが、目と舌を楽しまさせてくれます。

前世での三大珍味は、必ず一週間で制覇できます。

主食なんです…パンがフランスパンなんです。ハードなタイプが主流なんです…フレンチトーストが出てきた時は、感動しましたけど。

パスタなんです…これは、もう種類、形、食べ方豊富です！ただ、生じゃなくて乾燥パスタが出てきた時は、アルデンテと言う言葉を教えたくなります。

お米は、サラダの一部として硬めに調理されて出てきます。主食としては、存在しません。

で、デザートなんです…私も女の子ですから、大好きなのです。シュークリーム、ロールケーキ、ミルフィーユ、パイ、焼き菓子、職人さん達頑張って作って下さる、心が豊かになりますね。ただ今までチョコレート、カカオを原料とする物がでてきていないのです。ついでに生の果物も余りでできません。何かしらの加工が施されますね。

塩については、面白い発見がありました。塊だと薄いピンク色をしています…岩塩を使っていると推測します。海水からは精製してないのでしょいか？

水の環境が良くないのでしょいか？日常的にワインが出て来ます…水を用意するのを観察しなくては。兵士さん達にも水を飲む方は少なさそうですね。

やっぱり私には耐えられない事もありますね…改善を考えましょう。

まず、肉中心の食生活を、野菜、魚に変えていく。

豚や牛の飼育方法を変えて、品質を上げる。

野菜の種類を豊富にしていく。多分存在はしている筈だから、食べられる事をアピールしていく事にしましょう。大豆、トウモロコシがあるといいなあ。

ソバを探し出すこともしないと…さすがに麺類がパスタだけだと辛い。岩塩があるなら、かんすいがあるはずだから、中華麺できるよね。お米があるから、フォーも出来るし…

スープは、豚骨や鶏ガラで作れるよね。塩があれば大体オツケーなわけだし。

全体的に、バター、ソースに頼り過ぎだから、素材の持ち味を活かした、シンプル料理を目指してと。

あとは、チョコレート！これは多分薬としてならあるとおもっただけだなあ。もしあるなら加工して売り出せるし、ザッハトルテが食べたくて仕方がない。

お茶は未発酵、半発酵が有るから…多分、お茶は生産されている筈ならば、抹茶も作れるはずだし…最悪の場合は、粉茶でも構わない。あと子供の為にカフェインレスなハーブティーを流行らせよう。

コーヒーはあるのかなあ？この気候だと辛いよね…チコリから代理珈琲作るかなあ。

果物かあ…絶対に欲しい！季節の果物は、欠かせないよね。クックベリーだけじゃなくて、林檎とか丸かじりしたいなあ。

調味料に関しては、しょうがない部分もあるけど…塩と砂糖は、安定供給できるように大量生産をできる様にしよう。あとスパイスどうしよう？胡椒は高いし。やっぱりハーブしかないかな。

これは、この願いは、時間をかけて慎重にいきたい。五カ年計画でいく。少しすれば外に出る機会も多いだろう。気がついたフリをして、ドンドン取り入れていく。

トリスティンは、伝統と歴史の国だとおもっけど、私は我慢出来ない。良い部分は残しつつ、新しい風を吹かせてみせる。

私の将来の、主にプロポーションと胃袋の為に！

「フォルティス様、お時間に成りましたので…参りましょう」

ブレセアさんが無情にも、私を現実に戻してくれます。折角深く逃避していたのに…。

実は、治癒魔法の練習の為に兵士達の習練場にお邪魔しています。

今日は、女性だけ部隊の担当です。だから、失敗して肌に傷が残ったりしたら…とか考えるだけで怖くなります。ですが！自分から言い出した事ですから、泣き言は言えないのです。

ちなみに、男性の場合は緊張しません。怪我をして跡が残ろうとも、それは努力の証でしょうから。勿論、障害が残る様じゃ駄目ですけど。

そんな感じで、実地練習しています。ベテランの水メイジが控えてくれますから、指示を貰いながら水の秘薬と治癒魔法をかけていきます。

最初は、あまり上手に治癒できなかったのですが…本当に上手く出来なかったのですが…ある時、治癒魔法と言えば「ホイミ」ですよねえと思ひ至り、実行したのです。これが上手くいきました！キアリーやキアリクを試す場面は無いのですが、なにか一つ壁をクリアした気分ですね。

「一生懸命やって下さるのは、嬉しいです。けど、綺麗な肌が傷付くと悲しいですから、あまり無理な事をなさらないでくださいね」この言葉と一緒に治癒魔法をかけていきます。

だって近いうちに、私の親衛隊を作らざるを得ないのですが…女性だけで組みたいとおもつのです。貴重な人材を些細な事で無くしたくありません。

今はまだ、メイドさん達が守れる環境に居ますけど…それだけではいけない状況が生まれてくるはずです。

男が、お風呂とか就寝時に近くいるとか考えたくありませんし。

なんだか、やらなくてはならない事が増えてしまったかな？と思うのです。

姉様は、なにか考えているのでしょうか？話し合う必要がありますね。

私の食文化の考察と野望と魔法の練習。(後書き)

普通に考えて姫君の身近な警護に男は置かないとおもった。
外に行く場合は違うだろうけど…そんな疑問の回。

私と錬金と幻獣と水の秘薬造り

私と錬金と幻獣と水の秘薬造り。

こんにちは。とっても幸せを感じている、フォルティスです。

只今、幻獣のグリフォンに「ぎゅーう」と抱きついてるからです。大きいけど、フワフワしているし、目もかわいいし、泣き声もかわいい。この子は、気性が荒いらしいのですが、私には良く懐いてくれます！いつかは、この子に乗って空を飛びたいなあ。

兵士さん達に、お願いしているのですが、駄目という返事しか返ってきません。なにか理由があれば割り切れるのですが…あまりしつこいと、この子に会えなくなるかもしれないですから、おとなしくしましょう。

私が今いる幻獣小屋には、グリフォン以外にもヒポグリフ、マンティコア、ペガサス等が居ます。あれ？よく見るとナインテールフォックスもいます。まあ、確かに幻獣ですね。近くの兵士さんに聞いてみると、最近ふらりと現れたらしいです。珍しいし、害があるわけじゃないので、ここに置いてあるそうです…。ちょっと気になるので抱き上げると、ほっぺを嘗めてくれます。部屋に一匹くらい居ても構わないような気がしますね…。なにより魔法少女的（このハルケギニア的には少女メイジ？）なお約束で、小動物は必要です。後で、母上と交渉しましょう。名前とかどうしましょうか？メジャーなどこだと玉藻か久遠かと思うのですが…プックルとかチロルとか…

うん、この子の名まえは「セディア」ね！

「ねえ、貴方に名前付けていい？良いならセディアが貴方の名前よ」

しつぽを元気に振っているから多分良いのね。

「セディア、後から迎えにくるから、もう少し待っていてね」
善は急げとばかりに幻獣小屋から母上の元に行きます。

勿論、ちゃんとプレセアを巻き込んでお願いしたところ、セディアを連れて歩く許可を得れました。

姉様と寝る時も一緒に、寝てますし、大の仲良しになりました。

ちよっぴり脱線しましたが、幻獣小屋に来たのには目的があったからでした。

「ごめんね？痛くしないから、爪チョット頂戴ね」

グリフォンの爪を取り来ています。先日 of 約束通り、水の秘薬造りをするためです。これは母上が直接教えてくれるそうです、珍しいですね。

さて、目的を果たしましたし、戻りましょうか…ペガサスの前を通って行こうとすると、頬にふわっと触りました。なんだろうと？見ればペガサスの羽です！当然回収します。秘薬に使わないのなら羽飾りでも作れば良いだけですから。

只今、調合中です。

今、調合するのは治癒の魔法を助ける為の秘薬だそうで、とくに外傷に利くそうらしいです。

結構、神経つかいますね。

粉にした材料を水に溶かして、濾過して、蒸留してと。

出来た、この液体に魔法を掛ければ完成ですね？

セディアが嬉しそうにしています。

「はい！完成しましたよ。小瓶に詰め替えて、片付けをしましょう」
手を動かしながら母上に聞いてみます。

「これは、体の外側に利く秘薬ですが、うち側に利く秘薬も作れる
のですか？」

ひとつひとつ丁寧に洗って綺麗にしていきます。ピカピカのガラス
を見るのは気持ち良くなりますね。

「確かに、あるけれど…材料が入りにくいし、作り方が難しいのよ。
万能な秘薬なんて無いから、症状に合わせて作らないと、かえって
毒になるわ」

優しい母上にしては、シビアな答えです。

すり鉢に付いた、残りが取れない！母上、お願いします。

「まだ初めただけだけど、先は長いという事ですね。こんどは、
香水の作り方教えて下さいね」

それにしても、王宮の一室にこんな部屋があるなんて気が付きませ
んでした。有り体に言えば…まんま、理科の実習室です。アルコー
ルランプから出るスス？が強いのはご愛嬌でしょうか。

レシピがあるのを作って、練習あるのみです！

はやく、内臓に利く秘薬を作れるようになります！

でも、これって…材料採取さえあれば、リアルアトリエシリーズだ
よね。嗚呼ファンタジー！もう慣れたけれども。賢者の石とかスラ
イムは作れるのかな？

母上の香水作りを見学させていただきました！

ベースは、前世と大して変わらないのですが…確かに水メイジじゃ
ないとやりたいと思えないです。

香りの抽出とかで大事な温度管理は水メイジじゃないと難しいです
し、道具も沢山いるし。必要な材料も…知識も、膨大になります。

そんな中で気に入る香りを調合するなんて至難の技です。
バラの成分の抽出には、気が軽く遠くなりました。

さて、私も香水には興味があります。

なので、母上に手伝ってもらいながら、私オリジナルの香水を作ってみました。キラキラした星空をイメージした香水です！軽い甘さの中に、ちよつと冷たさを三段階にわけて感じられる様で、納得の出来になりました。出来れば温度によって香り方が変われば良かったです… 今後の課題としましょう。

後日、使ってみたところ… 好評を頂きました！
なんだか、嬉しいです。

この授業は、錬金を練習します。
ちなみに、青銅は楽にできましたよ。何回かしている内に形を創ることもできました。

今練習しているのは、炭からダイヤを作る事です。
炭素を加圧すれば確か出来たはずなんです、前世には工業用ダイヤが存在しましたし、炭素記号一緒だったはずです。だから簡単だろうと、考えたわけですが…

「錬金！」

目の前にあつた炭が小さくなりましたが、一応透明なダイヤになりました。

先生が、ディテクト掛けてますね。

「素晴らしい純度のダイヤです。でもなんで炭から出来ると考えたのですか？」

先生… 際どい質問しないでくださいね？

「ダイヤは地中に埋まってますよね？で、炭とダイヤにディテクト

掛けたら、似ている事に気が付いたのです。だから出来るかな？と」
用意してあった答えを出します、だって変な事を言っと、異端視されかねないし。

しかし、この成功は嬉しいですね。

大好きな姉様の誕生日プレゼントが作れる事が可能になったのですから。

待っていて下さいね！姉様。

私と錬金と幻獣と水の秘薬造り（後書き）

フォルがペットを獲得しました。

出来る事が増えてきたので自重しなくなってきたフォル。
そろそろ歳を取らせないと…

姉様の誕生日と私。(前書き)

なんだか、ようやく警告が役にたったかもしれません。
甘さは控え目にしてあります。

姉様の誕生日と私。

姉様の誕生日と私。

ゴリゴリ、カンカン、ゴリゴリ、カンカン…

突然の擬音から失礼します。

金属加工中のフォルイスです。

もうすぐ、アンリエッタ姉様の誕生日なのでプレゼントを制作中です。

力の弱い五歳児ボデーが恨めしいです。ダイヤを埋め込む為の台座を用意して爪を立てる為の作業をしています。

前に作ったダイヤは、メイドさんを通して売られました。かなりの大きさで高く売れたらしいですよ。せつかくなので、メイドさん達のおこずかいにしてもらいました。今している作業の口止め料も含まれてます。

結局、腕輪を作るには技術が足りないと言う事で中止しました。その代わりにブレスレットを作る事にしました。

金のチェーンを街で買ってきてもらってます。ダイヤを埋めた台座を沢山創ってチェーンに通せば、それなりに見える物になりますし、二連にすれば見映えは、ばっちりです。ブレスレットにしたのは…イヤリングは、まだ早いかな？と思ったのですが、大絶賛後悔中です。

主に時間的な意味で。間に合うかなあ？そういう意味では、ダイヤの作り直しも痛かった！イタズラ心で色が出る金属粉を炭に入れて

整形して鍊金したら、ピンクダイヤやらブルーダイヤが出来たので…金属粉の量を調整してグラデーションにしたりしました。出来は十分満足でるけど…本当に完成するのかなあ？姉様が喜んでくれると良いなあ…。

普段のお勉強をこなしつつ、姉様へのプレゼントを作る日々は、しばらく続きました！

久しぶりに、姉様との入浴です。明日が姉様の誕生日なので、お湯には、私特製の香油を垂らしました。姉様の好きな香水を邪魔する事のない様に作りました。

いつもは、メイドさん達が体を洗ってくれるのですが…今日は、ワガママをいって私が姉様を洗います。

タオルに石鹸を泡立てて、しっかりと洗っていきます。

首筋、背中、腕、と…

「姉様、前も洗いますよ」

宣言してから、前に廻って洗っていきます。あつ、ぴくって反応してますね。おもしろくなってきました。

「姉様、ここが弱いんですね？」

「フオル…お願いだから止めて」

「だって姉様、止めたら洗えなくなっちゃいます」

「だから、足の裏を柔らかく触りながら洗うの止めて」

姉様ギブアップですか…ちょっと残念です。さて泡を流して湯船につかります。

ふう〜、いいお湯でした。

つめたい牛乳でも欲しい所ですが…ここは、クミンシードをいれた

温かい牛乳をゆつくりと飲みます。これは、眠りに付き易くするた
めのものです。

姉様とは、私の部屋と一緒に寝る約束をすでにしています。

これからがメイスイイベントなんですよ。明日は、姉様の誕生日パ
ーティがあるのですが、私は不参加です…まだ幼いためです…なので
事実上、明日は姉様と一緒にいれない事になりますし、プレゼント
は一番に渡したいという変な欲があります。だからちょっとフライ
ングします。

部屋についてしまいました。なんだかドキドキします。姉様が喜んで
くれるのか？緊張します、泣きそうになってきました。

「姉様、ちょっと早いですけど、誕生日プレゼントです。一生懸命
作ったので、受け取って下さい」

テーブルの上に用意したプレゼントを渡します。

「ありがとうございます。今開けても良い？」

私の大好きな嬉しそうな姉様の笑顔…これが見ただけでも、頑張
ったかいがありますね。言葉が出ないので、うなづくことで先に促
します。

「ブレスレットを作ってくれたんだね。頑張ってくれたんだ…

じゃあ、フォルが付けて」

震える指先を抑えて、姉様の左腕に付けます。

「姉様にぴったりです。ちゃんと長さがあつて良かった」

思わず言ってしまった、一言にお互い笑ってしまったのは、悪くな
いですよね。

姉様ありがとう…フォルは姉様の妹に生まれて幸せ者です。
とても良い気分で眠りにつく事が出来ました。

後日聞いた話ですが…姉様のブレスレットが、パーティに来た人達の話題になったそうですが、また別のお話ですね。

姉様の誕生日の翌日…私が見たのは、姉様の部屋に積まれた沢山の贈り物らしき物でした。

姉様？これどうするのですか？

私は、王家の威光を恐ろしく感じました。

私と誕生日とお披露目。(前書き)

フォルがやっと歳をとりました。

私と誕生日とお披露目。

私の誕生日とお披露目。

姉様の誕生日からしばらく経ちました。色々頑張って日々を過ごしています！

こんにちは、フォルティスです。今、王宮のベランダで手を振っています。

今日は、私の誕生日！六歳になりました。

なので、国民へのお披露目をするとのことです。これで二回目らしいのですが、一回目は生まれたばかりだったらしいので、事実上初めてになりますね。

王族に生まれた者としての責務を果たす立場に、正式になったと考えると、身の引き締まる思いです。

父上、母上に姉様が後ろに立っています。ちなみに、セディアはお部屋でお留守番しています。それにしても…右手が辛くなってきました。もう…ゴールしても良いですか？でも皆さんが、こうやって来て下さるという事は、少なくとも嫌われてないと考えても良いですか？

国民の皆さんへのお披露目が終わったら、次は…パーティです。貴族の方々が次々とあいさつをしに来ますが、ありきたりな言葉だけ私を通り越して父上の御機嫌をとる行為にしかなくてませんね。私も「ありがとうございます。楽しんで下さる」位しか言っていないです。

名前と地図を頭の中で突き合わせてたりもしていたのですが、途中で頭が一杯になりました。

挨拶も大体終わりましたので、壁の華になろうとしていましたが、いけないと思い直しちよつとした余興をします。

実は、楽士達を巻き込んで…演奏会を計画してました。母上がもう快く許可を下さいました。

毎日時間を見つけては、前世の記憶を引っ張ってきて、楽譜をおこして、練習をしようと動きましたよ。音楽の無い生活は、潤いがないですから。このハルケギニアにも音楽はあるので、そちらも練習をして。

母上に一言伝えてから楽士達の元へいきます。皆さんの視線が私に集まります、手には子供用のバイオリン…

さて、人生初の演奏会始まりです。

～演奏中～

ふう、終わりました。

拍手を下さる皆さんに、まず一礼、次に楽士達に一礼して、わたしは舞台を降ります。

「最後に弾いた曲は、聴いた事がないのですが…なんだか落ち着く感じね」

バイオリンをケースに閉まっていると、姉様がこちらに来ました。

「えへへ…はい、双子の月を想って作りましたので。姉様、お気に召しましたか？」

前世でのお気に入りの曲が気になったみたいですね。姉様に褒めてもらえるのは、とっても嬉しいです。

「また聞かせて下さい。さあ、お料理が待ってますよ」

音楽も良いですけども、やっぱり…おいしいものも大事ですよ。今日の料理は、冷めても美味しい物が多いです。見た目も華やかで…一体どれくらいの手掛かっているのでしょうか？残した方もつたいないです。

ヒト心地ついたので、近くにあるジュースを一口…あれ？いつものと違います。美味しいですけど、なんでしょう…甘さが少ない？でも香りが良いですね。今後の探索リストにいれましょう。

それにしても、同世代の子供が居ないというのは、どういう事なのでしょうかね？子供もダシに酒宴交渉ですか？

長い時間、気を張り詰めていたせいか疲れてきました。

「フォルティス？疲れたのなら、無理しなくても良いですよ」

母上、ありがとうございます…遠慮なく失礼させていただきます。私は疲れて、すぐに眠りに付きました。

この宴、しばらく続いたそうです。

翌朝、めざめてベットから起きた瞬間びっくりしました。部屋のいたるところにお花が沢山ありました。なんだかセディアもびっくりしているみたいです。

「おはよう、フォル。昨日言いそびれたけれど、お誕生日おめでとう。お花と、これは私からのプレゼント」

私の隣で包みを渡してくださる、姉様。

これは…複雑なカットを施されたキラキラした瓶？

「このお花を使って、香水とかをつくるのでしょうか？それに入れてね？」

嬉しくって、でも言葉にならなくて、姉様にぎゅっと抱きついて、ただ一言、掠れた声で「ありがとうございます」としか言えません。もっと嬉しさを姉様に伝えたいのに、伝えられないもどかしさが涙になってこぼれてしまいます。

「ほら、六歳になったのだから、泣かないの。セディアも心配してるよ」

姉様がハンカチで涙を拭いてくださる横で、セディアが「大丈夫？」と言いたそうにしています。

「姉様、改めてプレゼントありがとうございます。セディアもごめんね、ありがとう」

姉様が下さった、この瓶は宝物です。私の人生で、手放せない物が出来た瞬間です。

自分でいうのも変ですが、さっきから、すすり泣きみたいなのが聴こえるのですが…この恥ずかしいシーンを見ていた人がいるみたいですね。

「あの、プレセアさんにシエラさん？感動はそろそろお終いにして、準備をお願いします」

あゝ恥ずかしい！

お花は、調合する部屋に殆ど運び込んで貰いました。

朝ご飯の後、プレセアさんに連れられて、ある部屋に入りました。

「この山が私へのプレゼントですか？」

つい確認を取ってしまいました。

「はい。こちらの紙に贈られた物と人を表にしてあります」

なんと言いますかね、豪華なのは豪華なんですけど…これを子供が喜ぶか？と聞かれたら、非常に微妙なものが多いですね。なんで、「東方から来たと言われる神秘の砂」とかを女の子に送れるのでしょうか？宝石、布地なんかは、ありがたく使うのですが…使わないと面倒な事になりそうですし。

あれ？水の秘薬の材料とか、ありますね。精霊の涙もある。なんででしょう？この「白く風化した丈夫な枝」とは…大体分かりました。

材料とかは倉庫に入れてもらって、後の物は母上に相談しましょう。

相談の結果…一応保管しておいて私が使いたくなったら、出す事にしました。後は、お礼状を出す事になりました。

謎の白く風化した丈夫な枝とは…珊瑚でした。

東方から来たと言われる神秘の砂とは…珊瑚が細かくなった、星の砂でした。

ひよっとして、珊瑚礁で出来た島でもあるのでしょうか？

私とトリステイン考察（前書き）

じわじわ内政に係わろうとし始めます。

私とトリステイン考察

私のトリステイン考察

ゴトゴト、ゴトゴト…

おはようございます。ただいま馬車に乗っているフォルティスです。

王都での私のお披露目が終わりましたので、今度は各地にお披露目のことで、姉様と一緒に一月程掛けて国内を巡る事になりまして、色んな所へ行きました。今は、その帰りです。

王都のトリスタニアの感想は…はつきり言って、狭いし汚い！です。戦争を考えての事なのか分かりませんが、区画整備もされていないのは、如何なものかと。雑多な下町も良いのですが、王宮へと続く道ですら、その様子です。衛生環境も良くないと見受けられますね。正直に言えば、文化ってなに？のレベル。表通りが、そんな感じならば…裏通りは、言わずもがなですよ。

馬車での優雅な旅ですが、周りは物々しい感じになってますね。全く気軽に町のヒト達と交流できないじゃないですか。ある意味正解かもしれないですけど、国の意味を履き違えている証拠にも感じますね。セディアをもふもふしながら、ささくれ立つ心を鎮めていきます。

街道は、それなりに整備されている領もありますが、道は人が歩いて作られるを地で行く所が多いですね。国土が狭いのもあるのです。ようが、領主まかせであるのも一因と思考いたします。

モンモランシ領のラグドリアン湖周辺は、それなりに景勝地として

整備されました。湖にも行きましたが、水の精霊さんには会えませんでしたね。

モンモランシーとも会いました。香水の話をしたりして有意義な時間でしたね。まだ湖の増水はしていないみたいでした。

ラ・ロシエールでフネを見ましたが、大きいですね。そのスケールに、ただ驚きました。

タルブで広大なブドウ畑と草原をみて感動しました。ワイン造りが盛んな土地みたいでしたが、ぜひとも修道院なりを作ってシャンパンを普及させたいですね。酒好きな神官と言うのも嫌な気がします……

ド・オルニエール……正直に言いますと、トリステインを象徴するような所でした。過去と現在を区別出来ずにいる感じがします。新しい事を始めるには、丁度良い気がしますね。

アングル地方……海辺は村がチラホラと見受けられるだけでした。しっかり整備すれば、別荘地にもなりそうですが、疫病があつた事もあり、敬遠されそうですね。ただ土地はあり、塩とか作れば人は集まり出しそうですね。

ラ・ヴァリエールですが、領地経営が機能している所ですね。

ひよっとしたら、トリスタニアより環境も良いかもしれないです。しっかり整備されているのは、さすがかと。ただ、ゲルマニアとの国境の方には行くませんでした。

やっと？ルイズに会う事が出来ました。ツンとした空気が漂い始めてましたね。同じ歳ですし、遊び相手に選ばれるでしょうから、その時に改善計画を始めるつもりです。

カトレアさんには、セディアを紹介しました。沢山の動物達と

遊べて楽しかったです。体の調子が悪くなり始めているみたいでしたので、ディテクトを掛けさせてもらいましたが…残念ながら原因は分かりませんでした。

エレオノールさんは、魔法学園にいるそうなので、お会い出来ませんでした。

トリステインを巡る旅ですが、途中でクルデンホルフ大公国にも立ち寄りましたが…トリステインよりもすっかり整備されていますね。領民達の表情も明るいです。公爵の人柄が出ていると思います。何故トリステインに属国しているのか疑問です。

ラ・ヴァリエールとクルデンホルフが手を結んで独立されたら、トリステインという国は長くない…か、逆に飲み込まれるでしょう。それが出来るだけの力があると見ます。

トリステインという国は、資源も少ないです。土地も豊かな所は少ないです、むしろ長年の疲れが出てきていると見ます。

第一次産業での復活は、難しい…加工産業で活路を見出して行くしかない。全体を底上げしながら、特化して行くしかないですが…道は長そう。

ならば、いつそのこと観光と芸術と学術の国にできないかな？でも、そうするには争いをなくさないと駄目ですね。

ひとまず、国民の生産性と摂取カロリーと所得を増やさないと。

お父様に、感想を言うついでに相談してみましよう。

私のメイドさん地位向上？（前書き）

会話が無いに等しい…。

私のメイドさん地位向上？

メイドさん地位向上計画？

「錬金！錬金！れんきーん！」

おはようございます。只今、ダイヤ生産中のフォルティスです。

香水とか水の秘薬の瓶の蓋を飾るための物です。系統別に色分けしておけば、分かりやすいのです。

あと、肌に効く水の秘薬を作つては、メイドさんたちにくばつてます。お城の中を歩き回つて気が付いたのですが…皆さん手が荒れています。同じ女として、見逃せない事態です。

大変なお仕事の環境ですから、日々のなかに潤いをとりたいまして、自分の作った瓶も一緒にプレゼントしています。

私の立場では、外に出歩く事が出来ないので、情報はメイドさんたちの話とかになります。潤滑なコミュニケーションがあるからこそ豊富な情報と話題が得られると思いますから。

最近始めたばかりですが、それでも入ってくる情報はあります。

街で新しいお菓子が流行つていたりとか、劇が面白かったとか。皆さんが楽しそうに話すのを見ているのは、目の保養になります。にぎやかですしね。

ただ、本の話題が少なかったり、手紙のやりとりがあまり無いのを見ると、識字率が低いみたいです。

これは、いけません。

普通ならば、ある程度勤めたら結婚なりで辞めていく人がいますよね。その経験や知識は、周りに伝わらないと無駄になってしまいます。平民（嫌な言葉ですね）貴族問わず、人間が生きていくには：そういうものが必要なはずで。出来る事が少なければ、人の活性が損なわれ、しいては国の損失になると思います。なんらかの理由を付けてメイドさんたちの教育をお願いしましょう。

まずは、母上を巻き込む事から始めましょう。

「メイドさんたちに指示を正確に出す為には、色々覚えてもらったほうが、効率が良いのです。最初は上手くいかないかも知れませんが、あとから効果がでます」

「フオルは、難しい事考えてるのね。でも私だけじゃ判断出来ないわ。お父様や枢機卿にもお話しなくては。ちゃんと形にしないさい。私も一緒に考えます」

あれ、それだけですか？でも母上の助力が得られるのなら、私だけより早く上手にいきそうです。

「メイドさん改造計画（草案）」

この計画の目的は、メイドさんを教育する事により、私たちの生活を良くする事にあります。

1．礼儀作法の教育。

？？　メイドの作法が洗練される事により、対外的にも格調の高さを示す事が容易にできるため。

2．読み書き計算の教育

？？　出身地などによる、感覚の差が大きいため、求める事の出来ない事が多い。それを埋めるため。知識、教養を備えるためにも、

これは大事な要素。

副産物として、退職後の生活の選択が増える。憧れの職業として目標になれば、自然と質の向上が見込まれる。さらにひろがれば意思の伝播の容易さも見込める。そういう者たちがいれば周囲へ良い影響を見込める。

これが通れば、少しは改善できるはずです。要は、トリスティンのメイドさんのブランド化ですね、王宮を出た後、他の貴族へ雇われる時の条件を良くしてあげたいので。天下り方式が成立すれば、自然と様式が確立されます。

さらに言えば、専門学校化して実習の場を王宮に出来る位になれば文句はありませんね。人件費の削減も見込めるのでは？

なりたいと思わせる事により、少しは予習する事になるでしょうし、そうなれば識字率が上がり、文学などが広がりやすくなります。そうすると出版などの産業が活性化します。こればかりは、技術的にも必要な事がありますけれど。

人のうわさが広がる手段が増えると、貴族と呼ばれる者たちは、己が身を正しくしていなくてはなくなるのは明白。

馬鹿な貴族は、息苦しさを感じるかもしれませんが、そんなのは今迄がおかしかっただけです、緩やかに変わるので意外と適応していくかもしれないです。

これでメイドさん地位向上計画が完成しました。実行に移るのが楽しみです。

メイド服をもっともヒラヒラにしたいなあ。

私と姉様の御客様？（前書き）

ルイズが動かない。

解釈については、突っ込まないでください。

私と姉様の御客様？

私と姉様のお客様？

どっか〜ん！

爆発させていますね、ルイズ。おはようございます。フォルティスです。セディアもびっくりして小さくなっています。

ルイズが遊びに来てくれました。同世代の人が姉様しか居ないので嬉しいですね。

前に会った時に、魔法が使えない…爆発するという話を聞いていたので、広場で魔法を使ってみようという話になりました。

「スラりん、お願い」

私は、ドラクエのスライムの形をしたゴーレムを作り出して動かしています。それをルイズが全力全壊しています。姉様にはウォーターボールで埃を抑えてもらっています。

さて、疲れてきましたのでゴーレムの動きを止めます…まだ人型のゴーレムは維持だけで精一杯で、制御が出来ないので、要訓練です。はつきり言って、ルイズの爆破は羨ましくなる位の破壊力です。ダイヤを破碎することも出来そうですね。でもルイズ？うつとりと恍惚の表情を浮かべないでくださいね。ちょっとドキドキしますから…。

「ルイズ、フォル、そろそろ休みましょう」

一時間位続けていたのでしょうか？ちょっと汗をかいてしまいました。

「フォル、ずいぶんぼこぼこになりましたが、大丈夫ですか？母上

に怒られないですか？」

「姉様、母上には許可を得ました。それに此処は花壇にするつもりですから、都合が良かったのです」

さて、椅子に座ってルイズを待ちましょう。

なんで、こんな事をしているのでしょうかね。

「ルイズは、本当にスペルを間違っていないのに、結果が伴わないですね」

あゝ姉様？あんまりはつきり言わないで下さい……ルイズがうつむいちやってますよ？

「ルイズ……姉様がごめんなさいね。ただ、ルイズは何を考えて魔法を行使してるのですか？」

私の経験から言うならば、魔法を使った結果を思い浮かべる事ができないと成功しないです。外見さくらで、中身リリカルなんていうチートな杖でも無い限りは。確かにちょっと不思議な杖ではありませんけど。

「えっと、ただスペルを唱えて、杖に力を送り込む感じだけです」

弱々しい声でぼつりぼつりと答えるルイズ……なんとかしてあげたいですね。使える人間からすれば、感覚的にしか説明出来ないのも、その答えは間違っていないのかもしれないですね。

「姉様、プレセアさんにお茶とお菓子を持ってきてもらって下さい。多分、中にいるとおもいますから」

姉様には、少し席をはなれて頂きましょう。

「ルイズ、2つの道があると思います。厳しいのは分かっているのですが、みんなで助け合いながら幸せになる道。楽をできますが、一人で進み、幸せになれるか分からない道。どちらを選びますか？」
お願いだから、後者を選ばないで願います。

「……みんなで幸せになれば、いいなと思います。」

迷いながらもルイズは答えをたじてくれました。後は、言葉通りに、皆で努力あるのみです。

「お待たせしました。」

ブレセアさんがお茶を持ってきてくれました。

「ルイズ、クックベリーパイもあります。食べたら、もう少し魔法の練習をしましょう」

あつ、ルイズの目が輝いてますね。やっぱり笑顔が一番ですよ？
ちよつとした悪戯を試してみましよう。

「ルイズ、クチを開けて？はい、あゝん」

小さ目のパイにレビテーションを掛けて、ルイズの口元に運びます。

「あ、あのフォルティス姫？」

戸惑ってますね、ルイズ。

「フォルと呼んで下さい。さあ、あゝん」

もう一回チャレンジです！

「あゝん、ん？フォル様？」

あれ？ルイズの口に入ったと思ったのに。

「うん、やっぱり美味しい」

姉様、なに横取りしてるのですか…席を立てまで。

「あゝ、アン様なにをするんですか？」

「だって私もパイ食べたかったから」

「うゝゝ」

姉様、妙に勝ち誇った顔しないで下さい。ルイズは年下なんですよ。

「姉様もルイズも、落ち着いて下さい。はい、口開けて」

もう一回ルイズにパイを向けます。

「あゝん、…うん美味しい」

今度は、成功しましたね。

「今レビテーションを使ってみたのだけど、私も最初は上手く行かなくて、姉様の方が先に使えるようになったの」

今の考え方にいたる道筋をルイズに教えてあげましよう。

「確かにそうでしたね」

姉様が当時の事を思い出したのか、ちよつと視線がきつくなりましたね。

「成功したら、姉様に掛かって大変だったのね。多分だけど、目の

前にあつた石から姉様に意識が移つたからだとおもつた」

ルイズは何を言つてゐるか分かつてゐるかな？

「何を、何処へ、どれ位、動かすかを明確に思うと、思うがままに使えるようになりましたね。つまり…」

ルイズも座標指定は、出来てました。

「つまり、例えば…目の前の石を腰の高さまで浮かす…をただしく思えば成功するという事？」

気付いたみたいですね。

「そういう事です。後は、力を入れすぎない事でしょうか？カップに水を入れすぎたら溢れるのと一緒です。」

力が強すぎるために爆発するのですから、意識して調整すれば、きつと正しく発動するはず…後は練習あるのみです。

「でも、爆発はルイズだけの魔法みたいですね」

今まで静かだった姉様の一言。

それ、私も言いたかつたのに！

さて、折角遊びに来てくれたのですから、「遊びましょう」という事になりました。

姉様のお部屋で、遊んだのですが…三人でおもちゃを取り合いしたりとか、かなり騒がしくしてしまいました。

楽しい時間は早くながれて。湯浴みを済ませた後、バイオリンを持つてベランダに一人で出ました。
昼間ルイズに求めた選択は、私の為だけの物じゃないか？と思えて、悪い事をしたなと思うのです。

色々考えていると、心がささくれ立ってきます。
心鎮まる曲を弾いて、収めましょう。

私の悩みを解決してくれる、勇者は現れてくれるのでしょうか？でも、今は賢者求む、急募。

私と姉様の御客様？（後書き）

なんていうか…レビティションがまた変な事に使われた。

私とセディアとバカンス！（前書き）

なんだか題名と違う気がしますけど、投下します。

私とセディアとバカンス！

私とセディアとバカンス！

お豆腐が食べたい、冷奴で。枝豆も。
こんにちは、フォルティスです。

ルイズは、あれから魔法を成功させる事が出来ました。月に一度位の割合で遊びに来てくれますが、ツンとした所は、まだありません。このまま育っていくのでしょうか？

夏になって気温が上がってきました。

ちよつとバテ気味になりそうです。夏バテした時に食べたいのは、豆腐なのです。

豆腐の野望の為に、海に行かないとなりません。

大豆はある事は知っています。

母上に海の方に避暑へ行きたいとお願いしてあります。準備は整いました。

明日の朝から、出掛けます。ただ、今回は私とメイドさん、護衛、その他十人位で行く事になりました。

初めての経験なので、ちよつとドキドキしてます。

私の花壇ができました。ルイズと荒らした所を整地するさいに、どうせならとばかりに作りました。ただ、姉様や母上の希望も聞いてますので、お花にハーブ、野菜、果物の木を植えてますので、ガーデンングではなく、家庭菜園の趣きがあります。そんな中でも一際目立つ苗があります。

セディアが種を持ってきたのでしょうか？植えた覚えのない、木で

すかね？気が付いたら芽が出てました。なんだか気になるので、育てて見ましょう。

木が送られて来た事もあります。隅に配置しましたが、これは桜？梅でしょうか？なんだか分かりません…ただ貴重な木だと説明がありました。送ってくれた方には、御礼状を送りました。

ああこの花壇のお手入れもお願いしなくちゃいけないですね。

目的地まで5日、つまりは4回は宿泊しなくてはならないのですが、なんで視察みたいになってるのでしょうか？確かに「おらが村の名物さ食ってつてくれ」みたいなのを、期待していたのだけ。村長が出てきて、名産を説明したりとかしてるの？

ただ収穫はありました。綺麗な湧き水がある村で、山の斜面一面にソバの花を見かけたのです。綺麗な花を咲かせるけど、匂いがあまりよくないために自生させているだけだとか。他の作物を植えてみても、良く成らないから別に害は無いと思っているのもあるらしいです。

なので、花が枯れて実を付けたら収穫して、乾燥させて下さいとお願いをしました。

秋が楽しみです。

その他の村では、山葵が見つかったり、牛を放牧したりしているのを見たりで、やるべき事が見つかった気分です。

そんな事をしながら、一日遅れで目的地に着きました。

着いたら着いたで、村長に挨拶したりとか、忙しい。休ませて下さい…バカンスなんです。

ちなみに、この村は漁業はしておらず、ただ海に近いだけの村です。浜辺に行って見れば、すつごく綺麗な景色が広がっています。

早速、海に出てみましょう。近くの漁村から船は借りてきています。さすがに、公害が無い世界です。水の透明度が高いですね、泳いでいる魚が見えて、底がみえます。潜りたくなりましたので、制止を振り切ってスパッツ姿で飛び込みます！

岩場があるので何か貝が取れないかな？と覗いて見れば…なにやらみた事があるのが。

船に戻って、袋とナイフを装備し直して、再び潜ります。

カキ、アワビやサザエらしき貝を回収しつつ、なんども潜りますが…潜りきれない所にホタテらしき姿が…悔しいですね。

さて、お昼ご飯分は取れましたから戻りましょう。

それにしても綺麗ですね…遠浅かと思ったのですが、ちょっと先に行けば深くなります。

ホタテらしき貝で、真珠の養殖出来そうかな？

「フォルティス様、大丈夫ですか？ちゃんと潜ると言ってから潜って下さい」

プレセアさんが怒ってますね。

「ごめんなさい。でも、お昼ご飯の材料を取ってきましたから、食べましょう」

船が上がって、体を拭いたら日焼け止めの水の秘薬を塗って、服を着ます。

白い肌が焼けて赤くなったら、みつとも無いですからね。

取ってきた貝は焼いて食べました。生で食べたかったのですが、おいしかったです。醤油が無い為断念しました。

さて午後からは、念願の豆腐造りです。海水から、にがりを作ります。朝から水につけておいて柔らかくしておいた大豆をすり潰すのが大変です。

「鍋に豆乳を投入」

やっぱりこれを言わないといけない気がします。豆乳を作り出し温めつつ、にがりを入れます。軽くかき混ぜながら固まるのを待ちます。固まったら布を敷いたざるの上に盛ります。半分は木綿を敷いた箱に入れて蓋をしてから、重しをします。

ざる豆腐と木綿豆腐の完成です。おからは、飼育用の餌にします。牛や豚の肥育に丁度よいかな？

村の人たちとの話し合いで、にがりと塩の生産をお願いしました。作り方を書いておいて、バカンスの間は監督もします。広い場所も確保したので、生産が軌道に乗れば価格も抑えられるはずです。

ホタテらしき貝を養殖する話をしました。元々真珠自体は少し取れるそうですが、小さかったり形が悪いのが多く宝飾品として価値が上がらないそうです。丸い核を入れれば丸が出やすい事などを説明して、養殖する事も聞いて頂きました。いかだや養殖に関する知識は、何かの応用だそうです。今すぐは成果が出せないけど、5年後には形になるはずです。真珠の養殖は、この村の主産業になるのですが、それほど遠くない未来のお話です。この事が、問題と呼ば

むのですが、それはまた別のお話です。

夜は、豆腐にトマトソースを掛けて食べました。最初は、今までに無い食材を皆さん疑いながらでしたが、綺麗に食べてくれましたよ。セディア用にお揚げも作りましたが、喜んで食べてくれました。キツネにはお揚げが、異世界でも通用したのは、ちょっぴり嬉しかったです。

日本食に欠かせない出汁ですが、鰹節が作れないので、魚の骨などのガラ等を使えば、取りあえずなんとかなります。元々臭み消しのハーブは沢山あるわけですから、問題はありません。

後は、この作り出したエセ日本食をどうやって普及させるかが問題です。貴族向けには、パーティで出せるでしょう。一般向けが難しい…この村では店をやっても赤字になるから…レシピを作ってトリスタニアにでも店を出しましょうか。食べてもあまり太りにくい健康食というのを売りにして。

2・3日料理を教えながらも、ゆっくりと過ごしてましたが、落ち着かなくなりましたので隣の漁村に出かける事にしました。

そこで見た光景は、感動的でした。

お魚が水揚げされて、沢山の種類があるので。

ただやっぱり保存方法が塩漬けだったので、塩水に漬けた干物を作ってもらいました。村人たちの反応も上々で、良かったです。これは、王都に居ても食べたいものだったので、白身の魚の干物を籠籠で月に一度位の頻度で送ってもらう事にしました。

氷を作れるメイジがいたので、鮮度の問題も解決です。

そんな風に動きまわる私たちですが、気が付いた事があります。そ

れは、今回お邪魔している所の皆さんと同じ食事を食べたいと言ったのですが、「姫様が食べるものじゃ無い」という言葉が常に出てきました。その地で食べられる物を食べただけですが、そんな所にまで選民意識の弊害が出ているのには、憤りを感じます。

「食事に貴賤は無く、美味しいのは、美味しい」と言ったのですが……余り理解されて無いようです。

バカンスだか視察だか分からない二週間も終わりに近付き、塩が出来てきました。岩塩に比べて、すっきりしていてスープに使うには、良い感じの塩になりました。最後の夜に、今までお世話になった御礼として、王宮で作られている料理を村の人たちと食べる事にしました。

最初は、おっかなびつくりしながらでしたが、お酒がまわってきた頃に感想を聞ける位にはなりました。まあ、感想は予想通りでした。「豪華でみた事も無い料理だけれど、なにを食べているか、分かりづらい」

この一言に集約されてしまいます。料理人たちは、予想していたのか苦笑いでした。この二週間は、現地の料理を見ていれば分かる事です。普段あまり食べない私が、美味しいと食べるのを見ていれば分かる事でも、あります。シェフ見習いの若い人たちを連れて来たのは、成功ですね。

私の初めてのバカンスは、色々なお土産を得て終わりを迎えました。

私とお父様とある日（前書き）

お父様、初長せりふ。そして、シリアス？

私とお父様とある日

私とお父様とある日。

おはようございます。

只今、サイレントをかけて、お父様の執務室で話し合っているフォルティスです。

名目は、バカンスの報告ですが、色々思う所があったので、長くなりそうです。

「フォルティスよ、海の方に行つて来てから出て来た食事だが、お前の考えたのがいくつかあるそうだな？」

そうです、帰つてきてから何回か、海のお魚が出てきています。干物がサラダになつて出てきたりしています。

「はい、あちらの方で美味しい物を食べて感動しましたので、お願いして出してもらいました。」

お父様の真意が分からず、普通に応えます。

「そう言う事では無い。向うの村長たちから塩の作り方が楽になったと、塩が送られてきた。その他にも色々やってきたそうじゃないか。どこで覚えてきた」

まあ、今まで出来ていなかった事が出来るとなれば、お父様の耳にも入りますね。

「本に書いてある事と、自分で調べた事を合わせて考えました。」
あらかじめ用意してあった言い訳を使います。

「塩については、それでも良いが、真珠の養殖とはなんだ？」
どこまでお父様は把握しているのでしょうか？

「真珠については、小さいのと大きいのがあるのが、分かつてました。突然、貝の中に大きい真珠が出来る訳ではないです。長い間に出来るのです。糸巻きと一緒にです。ならば最初に大きい芯を貝に入ればある程度は、大きいのが出来やすくだろつと考えました。」

子どもらしい考え方で、説明します。

「成る程な。しかし、そんなに真珠を作ってどうする？ なにもならないだろう。」

そう、言われてしまえばそうなのですが…

「これを見てください。この色をした宝石が他にありますか？ この色は、肌の色に近くとても映えます」

向うで貰った形の歪な真珠を見せます。

「成る程。女は欲しがると言う事だな」

お父様が納得する材料になって良かったです。

「そうです。女の子は、こう言うの好きですから。それに、今まで捨てていたのも加工すれば形になります。広く行き渡れば有名になります」

なんだかんだ言っても、お金が無ければ経済は動きません。

「分かった。これから何かするのなら一言でも良いから相談をしてくれ。色々あるのだろう？ マザリーニでも構わない。」

ならば、その言葉に甘えましょう。

「では、お願いがあります。こちらの紙を読んで下さい。これをして欲しいのです。」

メイドさん地位向上計画を差し出します。

「お前は、こんな事を考えていたのか？ これはマザリーニと話し合ってからだな」

そんなに簡単には… いかないようです。障害が多そうですからね。

「フォルティス、お前はまだ幼い。このトリスティンの歴史と伝統をしっかりと勉強し、その大切さを知れ。やりたい事があるのは良い事だ。しかし、アンリエッタもマリアンヌもいる。お前だけが目立っては、国は割れるだろう。それをしてしまつては国は荒れ、民は傷つく。だから国王である父に相談しろ。やりたい事を教えろ、やり方を教える。あんまり自由にやると面倒も敵も多くなりすぎる。いざとなれば、アルビオンも味方だ、私はアルビオン国王の弟なのだからな。分かったな。」

いつになく真剣なお父様の言葉。だけど、大前提の貴方とアルビオンが約十年後に役に立たなくて、問題になる…なんて言えなくて、私は黙り込むしかない。

「食に関する事ならば、お前の自由にしても良い。それ以外は相談しろ、これは命令だ」

これ以上に踏み込むと、自由は無くなるのなら、今は妥協をしておくべきなのでしょう。

「はい、分かりました。」

仕方ありません…廃嫡されては何も出来なくなってしまうからね。

「でだ、これからお前がやる事は何だ？美味しい物が食べられるのだろうか？」

お父様の空気が柔らかくなりました。

「これからは、新しい麵を作ります。香りが良い物が出来ると思います。後は、牛を改良します。柔らかく、脂ののった感じになるかと思えます。ワインも種類を増やしたいと思います。」

まだまだありますよ？お父様。

「よし。紙に書いて教える。美味しい食べ物、人生を豊かにするからな。」

お父様？親バカは良いのですが…姉様にもお願いしますね？
じゃないとこの先、大変な目に会いますから。主にこの国は。

私とお父様とある日（後書き）

フォルが色々やり過ぎるかな？と思い枷を少しはめてみた。

私の食いしん坊バンザイ？（前書き）

軽く閑話な感じです。

私の食いしん坊バンザイ？

私の食いしん坊バンザイ？

空は気持ちが良いです。

こんにちは。フォルティスです。だれですか？なんとかと、煙は高い所に行きたがると言ったのは。

タルブのブドウが収穫を迎えたという事で、籠龍で向かってます。

お父様との話し合いの後、一応ですが計画表を出しました。半ば呆れた顔をしていましたが、気にしません。

今回の使命は、ワインを改良する事です。水代わりにハルケギニアでは飲むのですが、さすがに赤ワインだけでは、飽きるだろうという事です。

タルブのワインが美味しいのは、ブドウが良いからだと思うのです。ちょっと楽しみです。

後、前回見忘れた、零戦（どうでもいい事です…ゼロ戦と言うとレイ戦だと言う方が前世では居ました。日本語は正しく読めと怒られたな…）見て、あわよくば合成ゴムをディテクトしてこようかな？と思いました。先ほど先触れが行きましたから、そろそろ着きそうですね。

村長を始め結構な人が出迎えてくれますね。

あつ、かわいい娘がいますね。前回忘れていましたがひよつとしてシエスタでしょうか？

さて、りゅうのはごろもを見せて頂きましょうか。

うーん、確かに零戦です。この装甲の薄さは予想以上ですね。うわー、このフレームの肉抜き凄い、聞いていた以上に凄い。物資が無い中作事が出来ただけだと言うと失礼に当たりそうですね。さて、足は出ていますし、ディテクトさせて頂きます。

よし、合成ゴムは解った。

エンジンは、外装剥がないと分からないなあ…さすがに、この間お父様に怒られたし、余計な事は止めますか。

さて、零戦は終わりました。

次は、ブドウとワインです。

やっぱりこのブドウ畑の眺めは、良いですね。

早速、ブドウを食べてみたのですが…ワイン用の品種みたいで、酸味が強いですね。香りも力強い。

これはこれで美味しいかも。でもスパークリングワインにするには、ちょっと重いかな？ロゼにすればなんとかいけるかな？決まりました。

我俣を言って、丸ごと圧縮するはずのブドウをバラして圧縮してもらいます。

そのあとの工程は、予め書いておいたのを渡して、理解してもらいます。ただ一次発酵の時に皮とかを出してもらうだけですけど。後は普段と変わらない作り方。

ただ、圧縮するときに歌う歌に感動しました。おおらかさ、やさしさ？たぶん、日常を歌っているだけでしょうけど。

今回仕込んだワインは、約一ヶ月後に出来るそうで、出来次第送ってくれるそうです。

そうそう、先に仕込んだワインの一次発酵が終わったらしいので、作業を見ていました。

捨てる皮とかの部分にもワイン？がまだあるので、蒸留してもらいました。ちょっと少ないのですが、新品の樽で熟成させてもらい、ワインの時と一緒に送ってもらいます。これは、簡易なブランデーです。深い味になっているとよいのですが。

他にも、アイスワインと、貴腐ワインも造ってもらいましたので、完成が楽しみです。これが上手くいけば、タルブ以外の産地にも付加価値のある製品が出来ます。

で、タルブといえば、ヨシエナヴェです。私が予想していたのは、ちよつと違うような気もしますが、なんだか和風の味になってますね。山菜は良いのですが、やっぱり鍋には、豆腐が無いと閉まらないような気がします。

さて、タルブでの用事も終わり、帰ります。

帰ったら、お父様に報告してからになります。ソバの村に向かいます。

ただ、醤油が無いのが残念ですが、水蕎麦や塩で楽しめば良いだけです。ついでにソバ粉のクレープも楽しみです。メイドさんたちに評判が良ければ、来年から、ソバを増産する運びになってますから…

更科（さらしな…ソバの実の中心だけを使う。）藪蕎麦（ソバの実全部を引く。黒つぶく仕上がる）夢は広がります。今年は更科のみで、小麦粉を二割足してまとめやすくします。

ちなみにフォーは、開発済みで、塩の鶏出汁で食べます。香りの強いハーブを添えるのはお好みで。メイドさんや兵士さんの夜食になっているとの事です。なんで思い付いた私が食べれないのでしょうか？不公平です。フォーの派生でライスペーパーも出来ました…野

菜とお肉を包んで色々なソースを掛けて食べます。ただし、ナイフフォークじゃ食べ辛い。中世ヨーロッパなら手掴みでも良かったはずなのに。もつと言うなら骨とかテーブルの下に捨てていたはずなのになあ。

後日の話ですが…ソバ粉のクレープは好評で、出入りの商人に作り方を教えて、街中にて売りに出されました。蕎麦じたいは、あまり反応はありませんでした。やっぱり醤油と昆布と鰹節なんでしょうか？

ワインですが…若いロゼワインを母上が事の他気にいられました。軽くて飲みやすいそうです。

あまり飲まないで下さいね？母上。アルコール分は変わらないはずですから。

これらは、当然パーティのメニューにも加えられて、食べても太りにくいと言う噂と共に、貴族の方々に広がりしました。

トリステインの食生活に、和食が入り込み始めました。将来サイト君が来たらおどろくよね？きっと。その為には、まかないになるくらい普及させなくては、いけませんね。照り焼きソースはどうしましょうか。

ちなみに、姉様はソバ粉のクレープがお好みのようです。野菜とお肉を巻いて食べてます。

お父様には、あっさり過ぎで物足りないようですが。たまにフォーを食べてるそうです。

?

私と日常とルイズ？（前書き）

きつと、たぶん、タイトルに偽り無し。

小学生の女の子同士のじゃれ合いは、良いよね！で書き始めたこの話です。

現段階での甘さの追求してみました。

私と日常とルイズ？

私と日常とルイズ？

花壇がお休みの季節にはいりました。貰った大きな木は、まだすっかり葉を落としてしまいました。

こんにちは、フォルティスです。

タルブからワインの第二陣が届きました。

ブランデーは、お父様が大層お気に入りようです。枢機卿と飲んで二日酔いになったと笑っていました。飲み過ぎに注意して下さいね、糖分が多いお酒ですから。

母上は、相変わらずロゼがお気に入りようです。私、家族をアル中にしてませんよね？

セディアが植えた不思議な木ですが…まだ正体が解りません。ゆっくり大きくなるのを待ちましょう。何の木なのか楽しみなかりです。

ついにチョコレートとコーヒーを発見しました。チョコは無糖で苦い為に薬になっていました。なので、砂糖（こればかりは、豊富にあるんです。）を入れて、嗜好品としましたが…今、トリスティンで出回っているのが、すっごく薄い一口大の板チョコと、何故かある甘いオレンジピールのチョコがけ。これって、酒のツマミの様な気がします。あとは、チョコレートケーキ…これもお酒の風味が効いています。いくらワインを水代わりに行っているからって、一桁代の子供に食べさせるものではないですよ。

コーヒーは、生豆で献上されました。私は火を通せば大丈夫ということで、しっかり焙煎をしました。皆さん甘く香ばしい匂いにつられて、豆を口にしましたが、口の中が粉っぽく、苦かったようです（当たり前）豆を麺棒で砕いて、ここはバリ式にカップの中で沈ませながら飲もうかと思っただのですが、布に包んで、鍋にドリップしました。

ブラックコーヒーは、酔い覚まし、眠気覚ましの薬となり、生クリーム、砂糖を入れたのは、お菓子のお友になりました。

献上してくれた商人さんは、町中で豆を定期的に売っているらしく、喫茶店でもメニューになりつつあるみたいです。

私と姉様は、勉強をしたりしつつ、たまに街にお忍びで出て見てまわったりしてました。（きっと私たちに甘いお父様ですから、護衛を後ろから付けていたとは思います）

その度にプレセアさんたちに迷惑を掛けてますが、二回に一回は、ついて来てもらってます。

タルプで合成ゴム（タイヤ）をディテクトした私は、馬車の車輪に合成ゴムをつけてみました。今まで乗り心地が悪かったのが、少し楽になりました。

姉様にも誉められました。

ルイズは、夏は会えませんでした。が、相変わらず月に一度くらい遊びに来てくれます。いつのまにかフライが使えるようになってました。いっぱい遊んで（喧嘩？）して、疲れたらお茶を飲みながら、お喋りして、また遊んで。三人で笑い合うのが嬉しいです。まだ、余計なプレッシャーは、掛かってないようです。

夜は、三人で一緒に寝ます、ふだんはセディアと寝てるので、ちょっとせまいけど、暖かいです。

今回は、私が真ん中です。

「魔法が使えるようになったのは、姫様たちのおかげです。姉さま、お母様に始めて褒められました。ありがとうございます。」

眠りに入り込む間際、ルイズにお礼を言われました。ちなみに姉様は、もう寝ています。

「うん。良かったね。ルイズが喜んでくれて、わたしも嬉しい……」
最後の方はたぶん言葉になってなかったと思います。ただルイズが手をにぎってくれたなと感じながら、意識が吸い込まれていききました。

姉様、ルイズと一緒に勉強をしていて気がついたのは、ルイズはもの凄く頑張り屋さんだという事。出来る出来ないではなくて、出来るようになるを目指しているみたいです。そんなに詰め込んでいても、余裕がなくなってしまうですよ。

「ルイズ？もの凄く頑張っているのは、良い事だと思うのだけれども、ちよつとやり過ぎじゃないのですか？」

さすがに心配になりましたので、声を掛けてみます。

「フォル様：こんなのできないとお母様に知られたら、遊ぶ時間が無くなります。やれなくてはならない、なので」

ルイズの顔に怯えが見られますね。まだ六歳なのに何を考えているのでしょうか？あのオバサンは。

「ルイズは、どうしたいの？もつと遊びたい？それとも、今のままでもいい？」

ルイズへの意思確認をします。

「許されるなら、もつとあそびたいです。でも、ちい姉さまのお身体調子が不安定で……少しでも役に立ちたい。だからもつとやらな」と。

ああ……ルイズの責任感の強さは、もう始まっているのですね。うーん、これで私がかの仕事を与えると、さらに時間がなくなつて

しまいそうですね。

「分かりました。ただ約束してください…絶対に無理な頑張りをしないで下さい。私、ルイズがすきですから、倒れたりしたら心配してしまいます。きつと何よりもルイズを優先して、公務すら取りやめにしてお見舞いにいきますよ。ね、姉様？」

ちよつと脅させて頂きますね。姉様も頷いていることですし、説得力も増しました。

「ええええ？ フォル様なにを言ってるっちゃ…らっしゃるのですか？ アン様も真面目な顔して頷いていないでください」

目を吊り上げて反論？ してますけど、顔を赤くして噛んだりしたら、カワイイだけで迫力ありませんよ？ ルイズ。でも、そんなに慌てる必要があるのでしょうか？

「ルイズ？ お顔が真っ赤ですよ？」

姉様、いい仕事しますね。

「アン様、私は赤くなんてしていません」

ルイズが頬つぺたを膨らませて、さらに反論しますが…

「あゝもう。ルイズ、カワイイです」

ぎゅゝとしちゃいます。

「もう、フォル様、さつきから何をおっしゃってるのですか！ 離して下さい。」

ルイズが、私の腕の中でジタバタしていますが、離しません！

「そんな、離せだなんて…ルイズは、私の事嫌いなのか？」

悲しさを感じる声と、前から抱きついたので、上目遣いに涙目が直撃したと思います。

「そんな事ぜつたいない」

仕向けたとは言えど、ルイズ？ ずいぶんはつきりと言ってくれますね。

「では、しばらくの間こうさせていてください」

ルイズは、諦めたのか…しばらく幸せの時間をくれたのでした。

ルイズが帰る日ですが…私は、ちゃんと見送りをする事が出来ませんでした。それまでが楽しかったので、離れる寂しさから涙が止められなくなっていました。

ただ、また遊びに来てくれるのを待つだけじゃなく…遊びに行く事を言えたのは、良かったかな？

姉様が、頭を撫でてくれたのは何故でしょう？

私と日常とルイズ？（後書き）

アンリエッタが秘かに姉しています。

今更ながらですが… フォルティスの略称フォルじゃくてルティの方が良かったかなと思う作者。

私と初めて?の出来事(前書き)

何回も、書き直したが…どうしてこうなった。

私と初めて？の出来事

私と初めて？の出来事。

こんにちは。フォルティスです。あれから無事に年が明けました。大晦日には、豪華なディナーを食べただけでした。朝早起きして一人で初日の出を拝み一年の幸せを祈ったりしました。

只今、プレセアさんと共に質素な服を着てトリスタニアの街中にいます。大きなリボンも装備して、完全お忍びモードで、遊びにきました。ちなみに姉様とセディアは目立つのでお留守番してもらっています。

市場を覗いているのですが、新しい果物とかが無くて、ちよつぷり残念です。それでも「妹姫に似たお嬢ちゃん、お使いか？良いリンゴが入ったよ！」とか声を掛けられたりしていれば、楽しくなってくるのです。

リンゴとか果物を少し買って、住宅街のある小さな一軒家を訪ねます。

「お婆ちゃん！フォルだよ。ドアを開けて」
ドアのノッカーを叩きながら、中に声をかけます。

お婆ちゃんと呼んでますが、血縁ではありません。ずっと前に迷子になっていた孫娘さんと遊んでいたのが縁で知り合ったのです。「せっかくだから、家でお茶でも飲んで行きなさいと」になりました。その時にしてくれたお話が面白くて、以降何度かお邪魔しに来ているのです。

ただ、この間バカな貴族がプレセアさんに声をかけて、強引に連れて行こうとしたのを、止めに入ったら、ファイアーボールを使って攻撃してきたのです。「フォル様〜！」いつも冷静なプレセアさんが悲鳴をあげます。

それに対処するべく咄嗟にウォーターボールを使ってしまった。そう、杖を出してしまったのです。それが原因で今まで隠していた姫であることが、ばれてしまいました。しかも、間が悪い事にお婆ちゃんがその場に居たのです。その日は、そのバカな貴族様を兵士たちと王宮に連れて行く為に帰らざるを得ないのです。

その貴族は、私に杖を向けて魔法を放った罪を問われ即日一族の名前に不名誉印を押され当人は打首にされたそうです。

私も8日間、必要以外部屋の中に居なくてはならない事になりましたが…それ以来、今日まで訪ねる事が出来ませんでした。

いつもは、一回で出て来てくれるお婆ちゃんなのに、五回呼んでも出てきませんでした。

「フォル様、今日のところは御手紙とお土産を置いて帰りましょう。また来れば良い事ですから」

裏手に行ってくれたプレセアさんが、もどってきました。

仕方ないですね、戻る事にしましょう。

後日、私宛にお婆ちゃんの家族から手紙と包みが届きました。

「フォルテイス様。」

先日は、お手紙をありがとうございました。母は、貴方が来て下さるのを楽しみにしてる、しがない物書きの私の話を楽しく聞いてくれて嬉しいと、語っております。姫様のおかげで楽しい最後の時間が過ごせたとも。

母は、安らかな顔で旅立つ事ができました。

家族一同、感謝いたします。

ありがとうございました。

包みの中身は、何冊かの絵本でした。とても優しい物語で、お婆ちゃん
の笑顔みたいでした。

もう、会えないのが本当に残念ですね。行っても迷惑を掛けるだけで
しょうから、お礼の手紙とお花を持って行って貰いましょう。お
墓の場所を聞いてもらっておいて、時期を見計らってお参りに行き
ましょう。

ダイヤの鍊金を練習をしていませんでした。久しぶりにやってみる
と、なんだか今まで以上に、力が通る感じがしました。なので、大
きい炭を用意して貰って鍊金をしたら…今まで中心に変化をしてな
かった部分も変化しました。喜びもあるのですが、それ以上に複雑
な気分でした。今度からは、形も整えられるように練習しましょう。

そろそろ、姉様の誕生日プレゼントを考え始めないといけません。
ただ、去年と同じでもいけないし。何が欲しいのでしょうか？聞く
訳にもいきませんよね。

ただ、私の気持ちを込めるならば、今年はお花をモチーフにしまし
よう。姉様もきっと分かってくれるはずです。エンゼルランプが良
いかも。それでいきましょう。

姉様と言えば、アルビオンのウェールズ殿下なのですが、今だお会
いする機会を得てませんですね。まだモード大公の噂は聞こえて来
ないから…一度お会いしておいた方が良いでしょう。フェイ
スチェンジのアイテムは、もうすこしで手に入るから、渡すことを
前提にするべきか。ブランデー持って行くしかないかな？レコン・
キスタは、水の精霊に注意しておくしかないですね。

ガリア介入は、しないと絶対安全とは言えないよね。でも他国が口

だして良いのか？悩み所ですね。取り敢えずあと五年はあるかな？王位継承問題を回避しても結果として問題が降ってきそうですね。だったら、戦争を前提にして準備しておいた方が、前向き？

ワルドは、聖地を求めるならば、勝手にすれば良し…国に支えてくれる兵士やルイズを危険に晒すことは、させない。重用しなければ…それで良しかな？

お父様にアルビオン、ラグドリアン湖に行く許可を取る事から始めましょう。

結果から言えば、ラグドリアン湖に行くのは簡単にはありませんでした。ついでは問題があるかもしれないですが、トリステイン側だけで無くガリア側も見たいので、許可を取り付けました。

今回は、籠龍に乗って行きます。護衛の方達は、グリフォン魔法衛士隊の方から五名来てくれました。トリステイン騎士の花形的存在です。王宮の警備はよろしいのですかね？グリフォンちゃんたちには、あとで美味しいご飯をあげましょう。

それにしても、空は気持ち良いですね。ちょっと寒いのが難点ではありますけれど。

「ルイズ？寒くないですか？」

そう今回は、ルイズと一緒に来ています。私はコートの中でセディアを抱っこしてますから、暖かいのですが。

「フォル様、私は大丈夫ですよ。このコートが暖かいですから。」
今、ルイズが着ているコートは、羽毛が入っているものです。フードには、ファーがついてモコモコしてます。これは、私が一から設計したものです。羽毛ふとんがあることに気がついた私は、さっそくコートを作る事にしました。お城にいる服飾担当に、概要を伝え

て生地から選んだりした、傑作なのです。

本当は、フードをパイル地にして獸耳を付けたかったのに、パイル地が無かったので、ファーを一部代用しました。子供には贅沢過ぎな気がしますが、カワイイは絶対正義です！そのためなら安いものです。姉様も欲しそうな目をしていましたし。

さて、今日はモンモランシ伯爵のお屋敷にお世話になります。

「フォルティス様、ようこそいらっしやいました。お待ちしておりました」

モンモランシ家全員でのお出迎えです。そんなに気を張らなくてもよろしいのですよ？

モンモランシーがお屋敷を案内してくれてます。まだ縦巻ロールではないのですが、リボンはしています。お土産代わりに持って来ていたりボンをあげました、将来のリボン同盟のために。

「こちらが、姫様がお休みになるお部屋でございます。窓からは、ラグドリアン湖が望めます」

なんだかモンモランシーの喋り方が硬いのです。同じ年なのに、これが立場の違いという事なのでしょう？

「モンモランシー？私は、メイドに案内を頼んだ覚えはありません。同じ歳なのだから、楽にしてくれて良いですよ。」

ルイズが、ちよっぴり震えてる？どうしたのでしょうか？

「いえ、私ごときが姫様にそんな振る舞いが出来るはずがございません」

はあ、モンモランシーも頑固ですね。

「もう一回言いますよ、モンモランシー。私は同じ歳の貴女にメイドを頼んだ覚えは、ありませんよ。どうか楽にお話しなさい？私は、こんな風にできるくらいに仲良くしたいと、願っているのですから」
モンモランシーの手をとり、指を組んでギュツとします。

「ひ、姫様？」

モンモランシー、目を一杯に見開いていますね。
もう一押しかな？

「ねっ？モンモランシー、名前を呼んで？」

「うっ」

ルイズ、そんなに睨まないで。私だって友だちが沢山必要なの。モンモランシーが怖がるでしょう。

「ふ、フォ、フォルティス様……」

そんなに、恐る恐るじゃなくても良いのに。

「フォルでも構いませんよ」

ブンブン顔を振るモンモランシーを、これ以上は攻められませんね。

モンモランシーが出ていきましたが、まだルイズが睨んでいるんです。ひとまず紅茶でも飲んで落ち着きましょう。

「ルイズ、そんなに見つめられると、私でも照れちゃいますよ？」

「フォル様、私は見つめてなんかいません！」

「ちゃんと、こっちを見て言ってください、ルイズ？」

「なんで、フォル様の顔を見なくちゃいけないのですか」

「それは、私が好きなルイズの顔をみたいからです。だから、ね」

さあ、ルイズこっち見て？

「失礼します。フォルティス様ルイズ様お食事のご用意ができたそうです」

ああ、プレセアさんタイミング良すぎですよ。ちなみに、私とルイズは、くっ付いています。

さすが、プレセアさん……そのスルースキルに、憧れます。

「ルイズ、お腹が空きました。なにが食べられるのでしょうか？」
ルイズの手を取って食堂に向います。

モンモランシ家の料理は淡水魚が中心でした。うなぎのゼリー寄せが美味しかったです。

明日のラグドリアン湖には、伯爵とモンモランシーが同行することになりました。

水の精霊さんは、現れてくれるのでしょうか？

私と初めて?の出来事(後書き)

ルイズをちよつとツンとさせたかった。

フォルテイス、ついに鰻発見。ヨーロッパでも鰻食べられるのですよ。

皮が厚いから蒲焼には向かないはず。

私と水の精霊と雪風？（前書き）

タバサさんが動かない、しゃべらない。
そして、やたらとオルレアン公が長い。
そんな回です。

私と水の精霊と雪風？

私と水の精霊と雪風？

おはようございます。

ラグドリアン湖に來ているフォルティスです。

モンモランシ伯爵とモンモランシー、ルイズと湖畔を歩いているのですが…対岸が良く見えません。将来、干拓をするという選択肢を取るのが良く分かりますね。この湖の源泉はどこでしょうか？下手なところ埋めて干からびさせないで下さいね。

ちなみに、伯爵を先頭にして歩いてます。ルイズと私とモンモランシーは、手を繋いで。後ろには、護衛の人たちがいます。

「こちらが、水の精霊の祠です」

どうやら、目的地に着いたようです。

「水の精霊に喚び（よび）かけていただけますか？」

伯爵に、お願いをしてみます。

「わかりました」

ブツブツ言っていますね、水面が波立ながら、盛り上がり…人型を為した刹那、私は杖を携帯モードで構えてしまいました。

「我を呼び出したか？単なる者よ。」

水の精霊来たのは良いのですが、若干こちらに視線が。

「第二王女が、お話しをしたいと言う事で、お呼びした」

あれ？伯爵が水の精霊にいていないですよ？将来怒らせるはずなのに。

「その、杖を構えし単なる者だな」

精霊さんは、これが杖だと知っているみたいですね。

「はい。初めまして、水の精霊さま」

事前の打ち合せ通り、目線で人払いをお願いしました。これから話す事は誰にも聞かれたくないですから。

「で、なにようだ。ひかるの杖を受け継いだものよ。の？あの杖はきていないのか？」

杖になまえがあつたんだ。

「水の精霊さま、私の考えている事をお読みください。それからお話をいたしませんか？」

精霊さんが、腕をうによくと伸ばして手に触れてきます。水だからといって伸ばさなくても良いのでは。

「ふむ、なるほど。分かった…どうすれば良いのだ」

あくまで、人任せにしますか？この精霊は。

「ならば、アンドバリの指輪については、水底へ沈め人の手に渡らないようにお願い致します。精霊様のお力を持つてすれば、回収も可能な筈。」

まさか、シェフィールドさん水の中まで行かないよね？

「うむ、そなたの言う通りにしよう。次はどうする」

ひょっとして、こちらに丸投げですか？

「では、私の近き者が病で苦しんでおります。精霊様のお力をお貸し頂ければ、ありがたく存じます。交渉役を務める者が湖の干拓を望みましたらば、指示をお出し下さい、従わせますゆえに。」

モンモランシ伯爵には悪いけれども、無駄に財力を使って欲しくは無いのですよ。

「分かった。そなたの望みは全て聞こう。杖を貸してくれ、力を与えよう。」

精霊さんが、少し杖に触れると、小さなハートの形をした水色のガラス玉が先に付きました。

「これで、どんな病でも直す事が出来よう。ただし、一回限りになるがな。次は、の？あの杖も連れてくるようにな。対価はその時で良い。さらばだ。」

そう言つて精霊さんは水面に消えていきました。

「杖について聞き忘れてしまいましたね」
精神的に疲れた私は、そう呟くしか出来ないのでした。

その後は、モンモランシ伯爵のお屋敷に戻りました。

「もし、干拓をお考えでしたら、かならず水の精霊様に御伺いを立てて下さい。万が一にでも、失態があれば私の、ひいてはトリステイン王家の名を汚す事になります」

分かってくれますよね？伯爵。

「はい、畏まりました。」

何でしょうか？外が少し騒がしいような気がします。

「旦那様、ガリア王家の勅使が来ました」

使用人が血相を変えて伯爵の執務室に飛び込んで来ました。

「なに、急いで応接間に通せ。今、行く。」

はい？ガリア王家からの勅使が来た？今日の夕方に、こちらから行く手はずだった筈ですが…。

「フォルティス様、申し訳ないが御部屋でお待ちいただけるか？」

「構いません。多分、私に関することだとは、おもいますが」

ちよつと心苦しいですね。

急いで部屋に戻って、出立の準備をしましょう…たいした荷物は無いのですが。

「ルイズ、プレセアさん、荷物はまとまっていますか？それと、2日位帰るのが遅くなります。ラ・ヴァリエールに寄ってから帰りますと、手紙を出して下さい。」

なんだか、外は使用人さんたちが戦争のように動きまわっているし。まさか、王子様たちが来るなんて言わないよね。

「失礼します。あと二時間後に、シャルロット・エレヌ・オルレアン様がいらっしゃるそうです。御準備をお願いします」

シャルロット…えっと、タバサ？

なんでこんなに早く？確か、年下だったはずです。

まあ、なんののかんの言いながらも、プレセアさんは優秀で。二時間掛からずに準備は終わりました。

そうして、今はご両人の登場を待っている訳で。

「伯爵、申し訳ない。夕方にもガリア側に行く手はずだったのですが。まさか、お迎えが来るとは思ってもよらず。」

「なに、お気に召されるな。園遊会の演習として最適ですから。」伯爵？ 覇気がありませんよ。このお詫びはいつか必ず。

「シャルロット・エレーヌ・オルレアン様お着きになりました」やっと来ましたね。さて、気を引き締めてかかりますよ。応接室から玄關に移動します。

「お初お目にかかります。トリステイン王国、第二王女フォルティス・ド・トリステインでございます。こちらは、この地を治めている、モンモランシ伯爵。と、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。今回、私とともにしております」

まだ眼鏡かけてない、緊張しているんですね。よく、わかります。

「シャルロット・エレーヌ・オルレアンです。ガリアの案内役として参りました」

一応、鈴は付けるということですね。

「わざわざ、ありがとうございます。こちらは準備が済んでおりますが、お茶を用意させておりますので、御一緒にいかがですか？」とりあえず、一旦落ち着きましょう。特に話もなく…シャルロット様を先頭にガリア側に行くことになりました。

無事に、オルレアン領に入る事が出来ました。今晚泊まらせて頂くお屋敷を目の前にしているのですが、精緻という言葉がぴったり来るのです。

「さあ、お父様がお待ちです。どうぞお入り下さい」

はい？シャルロット様、今なにを仰いましたか。なんだか面倒事の空気が流れて来ましたね。

「失礼します。それにしても素晴らしいお屋敷ですね」

玄関に飾られている調度品は、トリステインのお城より品がありますよ…どれだけお金持っているのでしょうか？

応接間に通され、待っている間ルイズと私は、お互い無言です。

「お待たせしたね。オルレアン領を預かるシャルルだ。フォルティス姫殿下、ラ・ヴァリエール公爵の御子女ルイズ殿」
静寂を破りオルレアン大公のご登場です。

「お初にお目にかかります。オルレアン公、この度は申し出をお受け下さり、誠にありがとうございます。」

この後は、つつがなく進んだはずです。あまりの緊張にあまり覚えていません。

食事が終わり、そろそろ休もうかな？という段階でオルレアン公が話があるという事で、執務室で向かいあっています。

「こちらは、トリステインで作り始めた、葡萄を原料とした新しいお酒のブランデーです。ワインとは違う味わいがあります。どうぞ、御兄弟でお楽しみ下さい。」

取り合えずお気に召して頂ければ、それで良しです。

「ありがとうございます。メイドにつまみを用意させるが、フォルティス様はお酒以外がよさそうだね。」

あくまでも、爽やかな方ですね。演技が上手な様ですが、子供という事で油断して下さいね。こちらは、知謀某略は苦手なんですからまだ、無色に近いブランデーを飲むオルレアン大公に隙はありません。

「確かにワインとは違う味わいだね。あらゆる要素があるね。兄上も気に入る事だろうね、新しい物が好きな人だから。」

さて、どう動けば良いのでしょうか。まだ迷っています…あまりに私たち姉妹の未来の姿に似ているようで、オルレアン公の抱く気持ちに分からなくてもいいのですよね。

「お気に召していただいたようで、なによりです。まだ若いので、荒い部分もありますが、樽で寝かせれば円熟しますでしょう。後、十年もすれば。結果は出て来ます。楽しみになさって下さい」

「それは楽しみだね。どうせだから、いまからリザーブ（取置き）御願いしよかな？僕も美味しいのを味わうのには、労力を惜しまないからね」

欲しい物（王位）は、全力で取りに行くのですね。

「それでは、リザーブをお受けいたします。相応しい時にお出しいたしますね。どの様な時が宜しいでしょうか？」

「そうだね、笑って飲める時がいいかな？兄上と並んでね」

「でしたら、相応しい量をご用意しますね。そうですね…樽で、2つ程」

「それだけあると、全ての貴族で飲めるだろうね」

「まさか、最初だけですか？永く続くのですから、喧嘩にならない程に必要ではありませんか。私は姉と取り合う事が、ありますから」

「そんな時は、どうしているのだい？新しく用意はできないよね」

「そうですね。全てを曝け出す位はしますね、隠す事はしません。

母上が決める事が多いですが…お互い遠慮なんてせずにルールを決めて勝負します。逆にそれが、楽しくなってますからね。ただ相手の気持ちに分からない限りは、なにかしら残ってしまいますから、前後で話し合いますよ。欲しい、欲しくないとかは特に。」

「なる程ね。二つに分けると言う選択は出てこないのかな？」

「分ける事が出来ないから、喧嘩になるのです。果実があつたら、種に近い方が好きか？皮に近い方が好きか？位はあるかもしれないですけど。絶対に優劣が分かっているわけじゃないですから。」

「しかし、どっちかが甘いよね？」

「甘くても、食べにくい場合がありますから。たべやすくしてあげれば、シエアできるかもしれないですし。食べる事を目的にするなら、皮を剥く、種を取る、などをそれぞれやりやすい様にすれば、仲良く食べる事出来ますよ。ハエが寄生しない様に気をつけなくては、いけません。」

「そんなに深く考える事が出来るとはね……」

「私には、美味しいのが果実だけじゃないとは思っています。」

果実だけを気にして枝を傷つけてもいけないとも。まだ熟すまでに時間があるのでしたら……食べる前に、木を良く見たら良いと思います。」

「ありがとう。シャルロットとイザベラが良く取合いをしているから、どう解決しようか悩んでいたんだよ」

「男と女では違いがありますか？お役に立てたのなら幸いですね」

ああ、息が詰まりそうだった。私には二枚舌は無理です。

「さて、明日もシャルロットを連れて行って欲しい。王族同士友好を深めて欲しいからね」

その後は、ごくごく平和な物見遊山になりました。

シャルロット（様付は、物凄い勢いで嫌がられた）は、クルクルと表情が変わり、小動物みたいな感じでした。

こうして、私のラグドリアン湖訪問は、終わりました。

次は、カトレア様の治療ですね。

私と水の精霊と雪風？（後書き）

精霊さんが良い人になってます。

オルレアン公とフォルの会話は、深読みしないで下さい。

もっと、頭の良い会話にするつもりだったのに、途中から脱線した。
つぎからは、ほのぼのします。

私と治療と調味料？（前書き）

今回は、色々な意味で反則かもしれないです。
理由、言い訳は後書きで。

私と治療と調味料？

私と治療と調味料？

うーん、トウモロコシが欲しい。ポップコーンが食べたいです。こんばんわ、フォルティスです。

波乱？のラグトリアン湖訪問を終えまして、ラ・ヴァリエール領、ルイズのお家に向かってます。勿論、籠龍に乗ってますし、グリフォン隊も同行してますよ。ただ、お昼過ぎに出たので、今日は途中で一泊します。

セディアとグリフォン（くん？ちゃん？どっちだろう？）たちに、周りに無理を言ってルイズとご飯をあげているのですが…雑食みたいですね、雑穀と草混ぜたのを、もさもさと食べています。こう、肉食だとばかり思っていたのですが…意外でした。

良く考えれば、宿屋に泊まるのは初めてですね。今まで出かける時は、計画された通りにしていたので、領主さんのお屋敷等に泊まってました。

あれ？グリフォンちゃんたち、もう食べちゃったんですね。

あっ！ルイズが手を噛まれたみたいです。手を振って痛がつてる？

「ルイズ！怪我してない？ほら、ちょっと見せて！」

手首を掴んで、掌をみますが怪我は無いみたいです。

「良かった。綺麗な手に傷跡が残ったら悲しいですから」

ルイズの手は、柔らかくて気持ち良いので、つい「ふにふに」しちゃいます。

「フォル様？そんなに心配しないで下さい。きっと、このグリフォ

ンもお腹が空いてたから、間違っただけですよ。」

なんでも無いって顔してますから、大丈夫ですね。

「それでは、グリフォンちゃんたちのご飯は終わりましたから、私たちも夕食にしましょう」

ちゃんと手を洗ってと。どんなのが食べられるのかウキウキしながら、食堂にルイズと向かいます。

薄焼きのパンは、ほんのり甘くて食べやすかったです。

コンソメスープ、素材の旨みがあって、なかなか良かったです。

鶏の香草パン粉焼きは、カリッとしていて美味しいです。

サラダ、ヴィネグレットソース（フレンチドレッシング）は、良いとしますが、トッピングにポーチドエッグ…瞬間に、今まで何故マヨネーズという物を忘れていたのか？疑問におもいました。近い内につくりましょう。

食事の後は、部屋に戻ります。湯浴みは、さっぱりとしますが、なんだか湯船に浸かって暖まらないと満足しないのは、このハルケギニアでは贅沢なんでしょうね。湯沸かし器とかマジックアイテムで作れないでしょうか？

ベットの中に入っても、もそもそ考えていたのですが、セディアの暖かさを感じたら眠りの中に引き込まれてしまいました。

朝が来ました。今日は早く出立することになってます。

朝ご飯をしっかりと食べて、ルイズのお家に向かいます。

籠籠の上で、ルイズに初めてカトレアさんが治せるかもしれないことを話します。

ぼろぼろと涙を流す姿を見て、やっぱり「ちい姉さま」は特別なのかな？と思ってみたり。

ルイズを抱えて背中を優しく撫でてあげます。

「ルイズ、あんまり泣いて目を真っ赤にさせていると、カトレアさんが心配しちゃいますよ」

あまり時間ありませんから、泣き止んで下さい。それでもヴァリエール公爵は、親バカで勇名なんですから。

「だって、ちい姉さまは、治らないと聞いていたから」
それでは仕方がないのかな？

ルイズが、ようやく泣き止んだ頃に、ラ・ヴァリエール公爵のお屋敷が見えて来ました。

庭先に人影がみえますね。もしかしたら、公爵夫人でしょうか。

滞りなく公爵夫人への挨拶をすませ、ルイズと共にカトレアさんのお部屋に来ております。

王宮も動物、幻獣はすごいと思ってますが、これには勝てないと思います。

「ちい姉さま。フォル様がご病気を治してくださいさるそうです」

ルイズがカトレアさんに抱きついて私が訪れた理由を説明してくれます。

私の周りには沢山の動物が来てくれます。撫でたりしていると心が和みます。

水の精霊の涙は、もう使っていると思うのですが…

「水の精霊の涙は、使わさせていただきました。最初は楽になるのですが…」

うん、やはり予想通りです…

私で、治せるのでしょうか？

水の精霊さんと一緒に治療をしている最中は、意識が遠くにいった様で、覚えていないのです。

終わったな…と思った瞬間、全身の力が抜けたのだけは、覚えてますが。

ふと、目を開けて見ればベットの中でした。まだ寝れると、丸くなくて目を閉じれば、頭の上に誰かの手が置かれた様です。

そういえば、最近母上に撫でられていないな…と思ったところで、この手は一体誰の？と気がついて、飛び起きようとしたのですが…チカラが入りません。

「あら、突然起きたりしたら駄目ですよ。ゆっくり起きて下さい」カトレアさんの声に応えて、今度はゆっくりと起きてみます。

なんだか、体の中が馴染まない感じがします。視界がクリアになるのを待って、周りを見渡せば、涙目のルイズとにこやかな笑みを浮かべたカトレアさんが、こちらを見てました。

「どれくらい寝てました？」

まだ日があるので、そんなには寝てないはずです。

「あれから、少ししか経ってません」

ルイズ、そんな心配そうな声を出されても、困ります。

「ところで、カトレアさん。お身体の調子は、いかがですか？」

まだ、はつきりとは分からないと思いますが、気になります。

「ええ、良いですよ。」

カトレアさんには、母性を感じます。遺伝子の謎ですね。

「それでは、しばらく様子を見て下さい。」

そろそろ帰りましょう。なんだか母上に甘えたくなくなりました。

「泊まっていて」というルイズを「後は、家族の話し合いです」という事にして、帰ります。

多分ですが、この時の私の頭の中は、マヨネーズとタマゴサンドで一杯で、自分が何をしたのか判ってなかったのだと思います。

私と治療と調味料？（後書き）

カトレアさんの治療の件ですが、スクエアのメイジと水の精霊の涙の解釈に苦しみ、明確には書きませんでした。

その一、水の精霊の涙が、水の秘薬な原料なのか？その物なのか？分からなくなりました。

その二、スクエアのメイジの凄さが、いまいちイメージしにくかったです。

その三、本当は、この時点でカトレアさんを治すつもりじゃなかった。少なくとも原作開始後の予定でした。解決方法は、アンリエッタとの合体魔法の予定で。

以上、言い訳でした。

私とマヨラー？と五分間戦争？（前書き）

今回は、頂いた感想をもって作りました。

なお、ある種の冒険をさせていただきました。

冒険と取れなくもないですが、価値観の相違と解釈していただきました
く思います。

消せと言つご意見は、給われませんので、お願いします。

私とマヨラー？と五分間戦争？

私とマヨラー？と五分間戦争？

こんにちは、フォルティスです。只今、お城の厨房でマヨネーズを製作しています。

「姫が厨房に立つなんて」と言われましたが、そんなのは目的の為には、些末な問題です。

さて、卵黄に酢を入れて攪拌します。次にキャノーラ油を入れてさらに攪拌します。最後に塩で味を整えます。

随分と簡略化しましたが、旨み調味料なんて無いのですから、仕方ありません。卵は有精卵、酢はリンゴ酢など材料に拘りました。

固めに茹でた卵を適度な大きさに刻んで、マヨネーズと隠し味程度にワサビを入れて和えます。あれ？ワサビ抜いて、キュウリのピクルスのみじん切りと、パセリとか入れたらタルタルソースだよね？

海老フライ…

食べたいな。

その日のティータイムには、玉子サンドができました。ただし、一口大に切られて…サンドイッチは、かぶりつくのが魅力だと思います。

この分だと、カスクート（バケツ）に野菜とチーズとハムを挟んだものも絶望的です。外で食べられるかな？

マヨネーズの味は好評で、シェフ達によって研究されて幾つかレシピが生まれました。

ここ、一、二週間あまり出掛ける事もなく勉強をしています。もちろん、母上に甘えたり空いた時間を使つては、セディアと遊んだり、

花壇をいじったりしてもいます。

後は、姉様の誕生日に備えてプレゼントを用意する日々です。

そんな中で、ある日お父様に呼ばれました。

「最近、お前が作ったマヨネーズか？あれは良いものだな。野菜との相性が特に良い…どこで覚えてきた？」

あれ？これは、まずい展開でしょうか。

「あれは、ドレッシングと卵の黄身が偶然混ざった時に、美味しかったので、再現してみました」

嘘は、言っていないですよ。思い出した切っ掛けでは、ありますが。そうか。アルビオンから来た時には、このトリステインの食事の美味しさに感動したものだ、その時の感動を思い出したのでな。アルビオンの兄上に自慢したい位だ」

本当に、このお父様は美味しいものが好きですね。

「アルビオンは、どのような食事が多いのですか？」

ここは、しっかり聞いておきましょう。参考になるかもしれないですから。

「そうだな。良くも悪くも素朴だな、料理にあまり手間を掛けないだろうな。素材を単独で食べる事が多い」

ヨーロッパに例えるならイギリスですか。ならば、トリステインの料理は感動物かもしれないですね。

「これからも、美味しい食べ物を見つけて来てくれ」

ハードルを上げてくれる、お父様に私は苦笑いを浮かべるしかありませんでした。

今日のお昼は、サーモンフライだという事なので、タルタルソースを用意してみました。

私だけ時間がずれてしまったので、一人で食べてます。

「フォルティス、あなたは深いコクのあるマヨネーズ、爽やかな酸

味のマヨネーズ、どちらが好きですか？」

突然後ろから表れたアンリエッタ姉様が妙な気迫をもって聞いてきました。サラダには、マヨネーズを使っていたので、お気に召したのだらうと思っていましたか…

「どちらも素晴らしいものだと思います。使い分けるべきだと存じます、姉様」

当然の事を答えます。

「フォルティス、あなたは敵ですね。あの爽やかな酸味の中に感じる塩気が野菜やお肉、お魚を引き立てるではありませんか？なぜ、分かってくれないのですか」

ちよつと姉様？なにを錯乱なさっているのですか？

「私も苦手なおさかなを克服できました。しかし、コクの深いマヨネーズは、素材の味をころしてしまつてはありませんか！爽やかな酸味のマヨネーズこそが至高なのです。そこに棲み分け等無用ではありませんか！受け入れてくれないのですね。よろしいです、ならば戦争です」

姉様、私は悲しくなりました。

そんな血迷つた事をするならば、全力でお相手させて頂きます。

「ならば、私はマヨネーズを捨てます。今後一切この王宮のテーブルには、出てこないでしょう。なぜならば、食べ物は何の道具ではないからです。」

姉様、あの暖かい姉様に戻ってきて下さい。

「食べ物、人の心を繋ぐものです。各自理想はあるでしょう。しかし、これを食べて下さい…」

私は姉様に一口、ソースを差し出します。

「ベースはマヨネーズで出来ている。

具は茹で卵とキュウリのピクルス、

香りは、パセリ。

幾たびの試作を重ねて完成。

ただ一つの邪魔はなく、

ただ一つの味ではない。

担当はここに一つの塩気をもつ。

ならばこのソースに貴賤はない。

きつとこのソースは、こう呼ばれるだろう…

タルタルソース！」

姉様の口の中に入った瞬間、目を見開き味わい始めました。

「このように、酸味とコクのあるものがまとまるのは、マヨネーズがあつてのことなのです。姉様は分かっていない…マヨネーズの偉大さを。貴賤などないのです、だからこそ棲み分けられるのですありませんか」

あくまでも、マヨネーズはソースなのです。

「あなたの幻想、壊します」

さらにサーモンフライとタルタルソースを、姉様の口の中に追加します。

姉様は、涙を流して床にくずれおちました。

「私が間違っていたの？」

ただ一言、そう言い残してフラフラと食堂を出ていきました。

せっかく、温かいサーモンフライが冷めてしまいました。姉様が分かってくだされば、代償として安いものですね…きつと。

私とマヨラー？と五分間戦争？（後書き）

マヨラー度が高い一家になりましたね…。

特にアンリエッタ…頭が痛い子にもなってしまいました。が、パロデイーの回ですから有りかな？と。

タルタルソースの詠唱？は、実際にメールのやりとりの中で出てきました。

無限の剣製をやるなら、ブロークンファンタズムも…と。

なんだか怖いですが、やりきりました。

サーモンフライ、エビフライ、カキフライで悩んだりも。

私と姉様とマシユマロ？（前書き）

卵白をどうしようかと悩んだ話です。

私と姉様とマシユマロ？

私と姉様とマシユマロ？

いま、お花畑でお花摘みをしています。

こんにちは、フォルティスです。

とってもファンシーな光景ですが、考えている事はファンシーではありません。

花を乾燥させて、紅茶とまぜてフレーバーティーを作ろうと考えてます。お茶を楽しめるのは、うれしい事ですからね。茶ノ木は、二種類ありました。高くなるのと低いのが。なので、緑茶の粉茶も出来ました、お菓子作りなどに使われ始めてます。特に茶葉を使ったケーキは、美味くて…太りそうです。抹茶塩もどきを作りましたが、いまのところ…あまり使ってないです…魚介類の天ぷら美味しいのに。

マヨネーズですが、姉様にあまり食べると太りますよ！と注意したところ、出てくる回数が減りました。ただ、好みについては改心したみたいです。

最近、池にかなり大きいエビ？（ザリガニみたいなの）を見つけたのですが、シエフ達がいうには泥臭くて食べられない。ならば、泥を吐かせて見せましようということで、桶にいれて一日三回水を入れ替える事三日間。身だけをフリッターにして、マヨネーズと和える…簡単なエビマヨをつくりました。母上がこれを気に入ったみたいです。

こうしてマヨネーズが宮廷料理に取り入れられていくなかで、姉様の誕生日を迎えました。

水晶でエンゼルランプの花を模したのを、八本作りプレゼントしま

した。花言葉は「あなたを守りたい」表立って守る事は出来ないですけど、裏方から助ける事は出来るはずですから。

「かわいいお花ですね。花言葉は何ですか？」

私から、それを言えと仰るのですか？

「姉様、それはご自分で調べて下さい。かわいいお花ですから作ってみました」

本心は秘めて、誓うものですからね。今は、平穏な時ですけど。

姉様の誕生日を祝う為なので、パーティーは昼餐会です。

そろそろ、同い年の子たちが来ていてもおかしくないはずなんですが、大人ばかりですね。

壁の花をしても仕方ないので自室に戻る事にしました。

マヨネーズの副産物としてではないのですが、卵白がよく余ります。なので、マシユマロを良く作ってもらってます。

カラーゲンが入っているので、肌に良いと言ったところ母上に始まり、肌を気にする人たちに広まりました。マシユマロをチョコレートドリンクに浮かべるのが好きで、今も飲んでいるのですが、マシユマロの表面が溶けて柔らかくなっているのが、たまりませんね。

姉様への諸侯のプレゼントは、それは豪華な物でした。それこそ一部を売り払えば平民なら何年か働かずに済みそうな位に。

でも、子供が喜ぶのは無いのが、トリスティン貴族クオリティーなのでしょうね。

その日の夜は当然、姉様と私は一緒に寝ました。

マシユマロで、でんぷんがあるのが分かりましたので、似非わらび餅（葛餅）を作ったのは良いのですが、ひとつ問題が発生しました。黒みつがないのです。最初は、赤砂糖でカラメルが代用できるかな

？と思ったのです。しかし、あんまり相性が良くないみたいでした。そこで、大豆があるならきな粉を作ればよいと思い立ち、早速作ったのです。やっぱり単体では、もの足りないです。なので今の所は、緑茶味の似非わらび餅に落ち着きました。夏になったら、冷たくして食べましょうか。さとうきびを探さなくてはなりませんね。

姉様の誕生日が過ぎると、私の誕生日が来ます。

今年は無理を言って、プレゼントは無しにさせてもらい、その代わりに同世代の子供がいる諸侯は、連れてきていただく事にしました。やっぱり、同世代の支持が大事だろうと考えたのです。

昼餐会の前に、子供たちだけでお菓子パーティを堅苦しい事を抜きにしてしました。チョコレートを始め、色々なケーキなど沢山用意してもらいました。やっぱり子供はお菓子を見ると笑顔になります。そんな中ギーシュ君が印象に残った位でしょうか？まだ純粹で、とても原作のイメージはありません…この後の彼に何が起きたのでしょうか？

その後は、立食パーティ形式で、諸侯のあいさつを受けたりして過ごしました。

途中、カトレアさんが来てくれたのは、嬉しい誤算でした。

「本日は、お招き頂きありがとうございます。先日の事をあわせ御礼申し上げます」

あの治療以来、カトレアさんとは会っていません。ルイズも、あまり喋りたがらなかったたので、聞くのを避けてましたし。

「お越しいただき、ありがとうございます。お体の方はいかがですか？」

今日、来れる位にはなっているのでしょうか。

「ええ、かなり良くなりました。来年からは魔法学校に行く事もないそうです」

ふわふわな笑顔を見るかぎり本当の様です。

「それは良かったです。私も気が楽になりました。おめでとうござ

います」

あれ？でも、ラ・フォンティーヌ領はどうなるのでしょうか？ラ・ヴァリエール領の一部なら問題は無いのですが。

そんなこんなでパーティは終わりました。

その日の夜は、姉様と体を洗いっこしたりして、一緒に寝ました。幸せな一年になりますように、と思いながら。

私と姉様とマシユマロ？（後書き）

やっと一年経過。

内政ものを目指しつつ、なんだか食べ物に終始しているこの話。

ゼロ魔の二次創作じゃないなんて思わないでくださいね。
きっとそのうちに、らしくなりますから。

ゼロ魔の世界の気候はどうなっているのだろうか？

私と焼肉と将来？（前書き）

なんだか、八歳と七歳らしからぬ話です。

私と焼肉と将来？

私と焼肉と将来

こんにちは。フォルティスです。

只今、厨房にいます。

改良した牛が献上されてきました。おからやブドウの搾りかす等を与え草だけでは無い飼料を与えたり、運動は適度にしたり、体をマッサージしたりして、肉質を改善させたものです。

牛タンが、目の前に置かれています。ちなみに、皮は剥かれてません。ペティナイフで皮を剥いで、先、中、元と分けて…と。先と中は、角切りにして玉ねぎ、セロリ等の香味野菜と茹でてシチューやスープの具にしてもらいます。問題は、元です…柔らかいの生かして、焼肉にしようかと思うのですが、厚さが問題です。厚く切れば旨みは存分に味わえます。薄く切れば、さらっと食べやすいです。ちょうどお城で働く皆さんの食事も近い事ですし、他の所も使って焼肉の試食会をやってしましましょう。

そんな訳で、シェフも含めお肉の薄切り大会を始めます。他の方には、野菜の準備をお願いしています。

皿に盛られたお肉たちは、焼かれるのを、待つのみになりました。しかし、お肉の盛り方が花びらというのは、無駄に豪華に見えます。賄いにこんな労力を注いでいて良いのでしょうか？ともあれ、Let'sパーティ！

急遽、庭にて鍊金で用意したバーベキューコンロに炭を入れて火は起こされています。

お肉が焼かれていく音、においが食欲をそそります。

焼けたお肉から、塩とレモンを付けて食べます。うん、美味しいです。他の方も食べ始めていますね、美味しい顔を見ると嬉しいです。レタスと一緒に巻いて、マヨネーズ（ワサビ風味）を付けて一口。うん、たまりませんね。

「あら、美味しそうなの食べてますね。フォルティス」

振り返れば、姉様がいました。なんで、この人は食べ物に釣られて現れるのでしょうか？

「姉様、食べます？」

仕方ないから、お行儀は悪いのですが、食べかけを口に入れてあげます。ちなみに、一応聞いていますが、答えは聞いていません。

「あら、ちよつと辛いけど、美味しい。やっぱりマヨネーズは美味しいのね」

姉様？そこなんですか。

「お肉の味や柔らかさは如何ですか？」

もう一口、姉様にお肉を渡します。今度は塩とレモンです。

「柔らかいし、脂が美味しいですね。でも、なんでいつもと違う食べ方をしているの？」

柔らかいと言われたら、成功したも同然です。

「そうですね。沢山お肉を貰いましたので、どうせなら皆さんで食べよう。お肉は、以前餌を変えて育てて貰ったものなんです、それに皆さんの美味しい顔を見ると嬉しくなりませんか？」

焼いた野菜も美味しいです。

「なら、なんで私を呼ばなかったの？フォルだけ食べるなんて、ずるいじゃないですか。」

お昼食べた後ではないですか？

「この時間に、食べるなんて事は、滅多にないですかね。それに、私だって試しに食べただけですよ？」

しかし、ドレスのまま焼肉をしたのは間違いでしたね。

「一体、フォルは何をしたいのですか？美味しいものを沢山作ってくれますけど。王族に名を連ねる物としてですが…」
確かに、そうですね。

「この国に美味しいものが沢山あって、皆さんが笑顔であれば良いのです。幸いに私には第二王女という立場が与えられました。新しい物を見つけて国民に発するのが、私の役目かと」
だって、それ以上出来ないでしょう？姉様。

「私は今までの伝統と歴史を守る立場だと考えてますよ。しかし、国民の皆さんが幸せに過ごせるのならば、変わる必要が無いかと」
真剣に考えてますか？姉様。

「姉様、古いままではならないのです。確かに優れたものは長く栄えるでしょう。でも、姉様だってドレスがずっと同じままでしたらいつかは新しい物を欲しがるでしょう？姉様だって、成長して手足が長くなるでしょう？母上と姉様では、好みが違う。それと同じです。しかし、それでは飽きてしまうのです。そんな事は関係なく女の子として、綺麗になりたいと思うのは間違いじゃないと思いますよ」

綺麗を追求するのは、女の子の特権だから。

「フォルは、将来どうなっていたいですか？」

そんな事、決まっているじゃないですか？

「目に入る範囲で構いませんから、みんな笑顔で過ごしたいです。力が足りないなら、手を取りあって。」

それ以上望みません。姉様だって対象ですよ。

「それは、私も入るのですか？フォルは、王族という事に拘ってないようですけど」

なんで、そんな事を思うのでしょうか。

「勿論です。姉様は入ってますよ。やるべき事とやれる事がありま
すが、やれる事をしているのです。やるべき事を姉様にお願
いしているのは、ちょっと甘えているかな？と思ってますけれども」

正直に言ってしまうば、私があちらこちらに動いているせいで、姉

様に国内の行事を押し付けてます。

「私は姉、フォルは妹。役割は違うのですから、それはあまり気にしていませんよ。ただ、ちょっと私も混ぜて欲しいなと思うだけです。ルイズだけが一緒に出かけるのは、ズルいと思います。」

なんだか姉様をちよつと見直しました。前世でのイメージで、自分の事を中心に考えているように見てましたから。でも、最後の一言で、台無しです。

「姉様が、私を連れて行って下さい。姉妹で行ったら楽しいと思いますよ？」

でも、姉妹どちらかがお城に居ないと駄目なように思いますけれども。

「そうですね。今度二人で、どこかに行きましょう。」

姉様は、それで満足したのか中へ戻って行きました。

この焼肉パーティが、お父様、母上に知られて二人で怒られて、2日後にまたパーティをしたのですが、とても気にいったようで、月に一度は行っ事になりました。でも、四人では寂しいですから、使用人さんたちを交えてする事になりました。これは、トリステインにしては画期的な事ですよね。

私と焼肉と将来？（後書き）

焼肉を食べに行った事による、この話。

でも、警備を除いた使用人さんたち何人居るか分かりませんが、多分相当な量のお肉が消費されるに違いありません。

私と姉様のトリステイン（魔）改造計画

私と姉様とトリスタニア（魔）改造計画

おはようございます。フォルティスです。

先日、枢機卿にお願いしてトリスタニアの精密な地図を手に入れました。それを姉様と一緒に見ています。

「こうして見てみると、ごちゃごちゃしてますね。もうちょっと整理したいですね。」

姉様の言う通りに、ものすごく整理したいですね。

「なら、理想のトリスタニアを書いてみませんか？まず、王宮を中心に考えてみましょう」

大きいものは動かせないのでから、それを決めていきましょう。

「それだと貴族の屋敷も動かせないですね」

確かに、そうですが、意外と邪魔なんですね。

「そうすると、整理出来なくなりますか？」

考慮する必要は無い様な気がします。

「それでやってみましょう」

こうして、姉様と私で仮想トリスタニア計画がスタートしました。

「王宮への路幅は、馬車がすれ違える幅が欲しいですね。せめて今の三倍以上。」

「貴族の御屋敷と、平民達の居住区は、交互にしますか？」

「お店は、種類別に分けた方が……」

「広場もないといけないですね。」

「公衆大浴場が欲しいですね。」

「教会は、お城の近くに建てて、人が集まるように広場も近くにしましょう」

「教会で読み書きを教えています、教会は祈りを捧げる場として、

静かにするべきでしょう。読み書きを教える場合は、別に作りましよう」

「出来れば石畳にして、綺麗な状態を保てるようにしたいですね」一度話し出すと止まる事なく、アイデアが出てきます。子供の戯言とはいえども、かなりの都市計画なのです。大雑把に配置を決めた所で、お昼ご飯の時間になりました。一時中断して食堂に行きます。

いつも、しっかり食べる私達姉妹ですが、食後のケーキもそこそこに都市計画に戻ります。

今までは、大雑把にしていたのを今度はなるべく正確にレイアウトし直していきます。細かいところは、つぶれてしまいました。が、花壇があつて並木道もあります、商店街の他に市場も出せるような区画…これに下水道を通せば、衛生面や警備面でも優れた主都になります。ただ、この計画が実行されるには、地震や火事がなければ無理だと思つています。姉様の顔には満足感が浮かんでいます、私も同じような顔をしているでしょう。もう外は夕日が少ししか出てません。

「あらあら、随分と熱心に話していたけど、このような事考えていたのね。どうせなら、私も入れて欲しかったわ。」

母上登場です。書き上げた地図もときを見えていますね。さらっと見えますが、普通の大人が見たら頭抱えて悩むか、怒り出します。

「母上を入れたら、もっと良くなつたかも知れませんが…遊びですから、気にしないで下さい」

余計な火は、早く消すにかぎります。

「そうです。これは、フォルとの遊びですから。母上が、気にしないで下さい。」

二人で、半ば必死になってます。

「あら、こんなに素敵なのに？残念ねえ…」

本当に残念そうに言わないで下さい。

「ところで、母上？どうして、こちらに？」

母上は、最近になってからですが、あまり私たちの部屋に来なくなりました。

「お昼に、早く部屋にもどったでしょ？二人の具合が悪いのかも思ったの」

のほほんとして、母上は言いますが…ならもつと早くてもよろしいのではありませんか？

「ご心配をおかけしましたね。大丈夫ですよ？姉様。ただ、面白くて夢中になってたのです。」

これがお父様の目や耳に入る事があれば、また怒られます。

「なら良かったわ。ところで、これは明日も考えるのかしら」

仮想トリスタニア計画を蒸し返す母上。姉様、どうします？

「明日のお勉強が終わったら、また考えましよう？どうせなら、もつと素敵に仕上げて悪い事はないから」

もう、母上の言う通りにします。こういう時の母上には、勝てません。

夕食を摂って、今日はお風呂の日なので、姉様と入ります。

夕食を食べている時に気がついたのですが、トリステインの食事は一皿が非常に完成しています。それを重ねる事で、持て成しの意味を成すのではないかと。素材を味わうのではなく、ソースで食べる部分もありますが、それだけ手間を掛けているのではないかと。素材を味わうために手間を掛けているのも、魅力を感じるのですけれど。

いかにカロリーを落としていくか？さすがに、気になります。仔羊のお肉の割合増やそうかな？それにしても姉様は、太らないですよね。大腸菌が違うのでしょうか？私も同じ食生活をしているので、変わらないはずなんですが。羨ましい…

「フォル？どうしたの。ずっと私を見ていますか」

頭を洗っていた姉様がこちらを見えています。ちなみに、石鹸も私の

手作りです…だって、泡立ちが悪いし、においも良くないのは、女の子としては許せない限りですから！

「いえ、姉様が細いので、羨ましいなと。」

本当に羨ましいです。

「そんな事ないですよ。最近、ドレスの腰の辺りがきつくなってきた感じがします。」

それは、成長というものでは、ないですか？

「でも、背も伸びていますよね。なら、気にする必要もないですよね。」

ちなみに、私はルイズとあまり変わりません。

今度は、乳製品が必要でしょうか？

私と姉様のトリステイン（魔）改造計画（後書き）

次話は、おもいつきり趣味に走ります。

私と姉様と母上の環境改善計画開始？（前書き）

アンリエッタ覚醒とマリアンヌ様の回です。

私と姉様と母上の環境改善計画開始？

私と姉様と母上の環境改造計画開始？

こんにちは。只今、会議中のフォルです。

議題は、髪の毛です。におい付きの石鹸で洗うのは良いのですが、枝毛を出さない為の補修が一般的でない事がメイドさんたちによって分かりました。

水の秘薬で補う方法は、あるのですが…一般の方には手が出せない程の値段になるそうです。

「母上、姉様。髪は長い友だちです…ましてや女にとっては、命と言っても過言ではないとおもいます。綺麗にしてないといけないとおもいます」

さらさら、しっとり、どちらでも構いません。が、しかし！パサパサは良くないです。

「そうねえ、フォルがメイドたちに水の秘薬を渡すまでは、同じ女として、見てられない部分があったわ。それが今ではすっかり見違える程、綺麗になったもの。それを今度は、平民が普通に使える様にするのね。」

母上は、分かってくれてます。

「今、使っている水の秘薬は駄目なの？すごく評判が良いけど…私も好きですよ。」

姉様、それが高いからなんです。

「姉様、今使っている物を水メイジが作ると、値段が高くなります。この小さいビンで平民が一人半年近く暮らせる位ですよ。私が全部作るわけには、いかないのですから」

実際に、お花が何本必要になるか分かりませんよ。

「今のは、香りにお花を使っているのよね。たしかに、そうなると

高くなるわ。だけど、ある程度香りが強いお花を使って作れるのなら、大丈夫にならないかしら？」

私が香りの強いお花が好きじゃないので、お城に飾るお花を替えてもらっています。母上、よく覚えていましたね。

「このお花なら香りは華やかですから、少なくとも良さそうですね。これは、なにが目的でいれているのかしら」

姉様が、指定したお花はたしかに華やかな香りになります。でも、抽出液がデリケートなのです。ちなみに、テーブルの上にはレシピが置いてあり、お花の抽出液が並んでいます。

「私たちが使っているのは、髪の手質を選ばないのです。分けて考えるのでしたら、これを入れないで済みます。ただ香りや効能で分けて作るのは、手間が掛かりますよ。質は落としたくありませんから、譲れない材料があります。」

ですが、入れる物を削れば半分になります。

「私に考えがあるから、任せて。多分、最初は貴族向けになるかもしれないけど、最後には誰もが使える様になるから。」

母上の言葉に、私たちは驚きを隠せませんが、お任せをする事になりました。

「あつ、そうだ。この間のトリスタニアの地図の話だけど、並木道を作る事になったのよ。川の近くしか出来ないのは、残念だけど。」
母上？手を叩きながら、ついみたいにサラッと凄い事言わないで下さい。私たち反応できません。

「これから、少しずつだけどトリスタニアを良くしていかないと、いけないと枢機卿が言っていたわ。さっきのと合わせて進めば、周りも納得すると思うから、あなたたちが考えている事を教えなさい。」

まさか枢機卿まで出てきているとは、知りませんでしたね、姉様。

「母上、フォルと言っていたのですが、この間の地図は王宮だけを残して考えたものです。実際に見て思ったのですが、ほぼ実現はしないとも。ですが、一部にある下水道を完全にするか、街中を綺麗

にしないと、いつか疫病が流行るでしょう。実際に病気をしている人が多い場所は、環境が良くありません。臭いが酷く、日当たりも良くありません。」

魔改造地図を作ってから、姉様と一緒に実際に見てまわりました。本当に陽の当たらない部分を見てしまったのですが、人間が暮らして良い環境では、ありませんでした。姉様が涙を流した位です。

「このトリスタニアに、その様な環境があつては、ひいては、トリティンの名を汚します。」

王の住まう都が変われば、他の所も変わるかもしれないです。

「綺麗なだけでは無い事を、知ったのですね。まだ早い様な気がしますけれど。」

そんなに、しみじみと感慨に耽らないで下さい？母上。

「なら、もっと勉強なさい。自分のしたい事と、しなくてはならない事を出来るように。」

真面目な顔をする母上に、私たちは、頷くしかありません。それにしても、母上は、原作での「甘やかされて育った人」という嫌いな部分がなくなつた様な気がします。娘を良くみて、力を貸してくれる存在になってますね。

「母上、これからはフォルと一緒にトリスタニア以外にも出掛けてみたいです。」

確かに、姉様と出掛ける事は、トリスタニア以外ないですね。

「まずは、姉様と一緒にガリアに出掛けてみたいですね。シャルロット様にお会いしたので、今度はイザベラ様にお会いしたいと思います。」

立場としては、ジョセフ殿下やシャルル殿下の様な気がありますが、やっぱり姫同士で友誼を結ぶべきです。ある意味で覚醒した姉様と私ならば、問題ないと思います。

「あら、それは良いけど、クルデンホルフにもベアトリス姫がいますよ。」

うーん…母上の言われる事も確かなのですが、ベアトリス姫の方は

近いうちに会うような気もするのです。

しかし、こうして考えると、姉様が原作でウェールズに惹かれたのは、必然だったのかもしれないですね。

だって、同じ様な歳で魅力のある男が居ないのですから。なにか呪いでも掛かっているのでしょうか？

「これからの事は、お父様と相談して、決める事にしましょう。そろそろお昼ですよ。今日は、何を食べられるのか楽しみね。」

この母上のことばで、今日の会議は色々フラグを建てて終了しました。

ちよつとでも、物事が前に進むのは嬉しいです。

私と乳酸菌飲料？（前書き）

ちょっと短いですが、投稿いたします。

私と乳酸菌飲料？

私と乳酸菌飲料？

こんにちは。只今、河岸に来ているフォルです。

何度も来ているのですが、川幅が広いのは、増水対策ですかね？堤防を作れば少しは狭く出来るのかもしれないです。

並木道を作ったものの、実質、堤防を作るのに近い工事になりそうです。並木道に植える木は、オークの木になりました。何故、桜ではないのでしょうか？良く考えて見れば、サクラノボを食べた事があるので、多分ですが、こちらでは鑑賞用では無いのでしょうか。ちなみに、水気の多い所でトリユフが出来るかは、不明なのですが。メスのブタさんを放せば、きっと見つけてくれるに違いありません。トリスタニアの辺りは、川の流れが緩いので、野鳥が沢山居ますが、外れになれば鴨が飼われています。何の為かと言われれば、フォアグラの為なんです。ちょっと可哀想な位に、餌を食べさせるのです。：要は脂肪肝ですから、当然と言えば当然ですね。お肉は、広く一般的に食べられているみたいですが、ご馳走のようです。アヒルも同様ですから、いつか北京ダックを再現したいです。

トリステインは、パスタが柔らかいのが特徴なのですが、ロマリアの方ではアルデンテがあるようです。気が早いというのか、短いというのか？分かりませんが、と、枢機卿が懐かしそうに話していました。柔らかいのは、スープを煮込む時に一緒にするからだそうで、トロミを付けるのも狙いらしいです。雑穀や硬くなったパンを入れて野菜スープを作るのと一緒にの感覚みたいですね。一度だけ、使用人さんたちの賄いを食べさせてもらった時に気が付きました。

トリステインも地方によつては、食べ方が違ったりするのらしいのですが、トリスタニアにいる限りは、分からない差ですかね？どうせなら、物産展でもやりますか？おらが村の名物を集めれば、ちょ

つとした旅行気分だし、人が動く…トリスタニアからお金が周辺に流れれば経済動くかもしれない。近いうちに母上に、お話ししてみよう。

ある日、厨房に顔を出すと（あまりに頻繁に顔を出すものですから、周りも気にしなくなりました）なんだか、困った顔をしたシェフ達がいきました。

「そんなに、悩んだ顔をして…どうかしましたか？」

シェフ達の話の聞くと、バターを作った後の脱脂乳が大量にあるそうです。普段は賄い等で消費出来る量らしいのですが…牛乳の中の脂肪分が少なくなっているみたいです。

「確かに、困りましたね。」

牛乳は、濃い方が美味しいです…

「とりあえず、一晩常温で発酵させてみましょう。ヨーグルトと砂糖を少し入れて、牛乳の袋の中で。」

思いついたのは、初恋の味がする、あの飲み物です。たしか、発酵させて作られているはずですし、馬乳酒をベースにしているのですから、牛乳で出来ない筈がありません…上手く酵母が働けば。固まらない様に、たまに攪拌をしてもらう事にしました。

翌朝、飲める状態になったので、出してみたのですが…

「ねえ、フォルが三人に見える…なんだか良い気持ちになっちゃった」

なんて笑いながら話しかけて来る姉様が出来上がりました。ちなみに、私も笑いながら、そんな姉様を見えています。スッキリしていて、飲みやすいので沢山飲んでしまいました。母上も

「これ、飲みやすいわね。」

と、言いながら飲んでます。

朝から酔っ払いが出来た理由は、加糖してしまったので、発酵中にアルコール分が出来たようです。これはこれで美味しいですし、作る事にしました…確か本家には、出産後の女性に飲ませると母乳の

出が良くなるなんていう話もあるのですし、有害な事は無いですよ
ね？飲み過ぎはいけないですけど…。

最初に作りたかった乳酸菌飲料は、砂糖を発酵後に加える事により
完成しました。発酵後は、加熱して瓶詰にします…殺菌する事で、
日持ちする上に味が変わりにくくなります。加熱殺菌前の原液を種
にすれば作り易くなるし、酪農をしている所の名産に出来るかな？

私と乳酸菌飲料？（後書き）

ちよいと調べに、図書館行ってきました。

調べる程、フォルがガリアの人間に思えて…書き直しレベルな程。

だが、このまま行く事にしました。

更新は遅くなりますが…ゆるく進むこの小説を、宜しく願いします。

私の工業考察?とお魚。(前書き)

今回は(も)会話が無いです。そして一部毛色が違うお話になります。

私の工業考察？とお魚。

私と工業考察？と、お魚。

ゴトゴト、ゆさゆさ、ゴトゴト、ゆさゆさ……

こんにちは、馬車に揺られているフォルです。

馬に引かせる客車を改良して地面からのショックは、少なくなりました。

今回施した改造は、客車の骨格を梯子状に組み上げて、内外装を張り付けました。足回りは、悪路が多い事から耐久性を重視して板バネにしてみました。もちろん、板バネにゴムを挟み込み衝撃を軽減させてます。

バネの可動領域を少なくさせて上下動を小さくした方が、酔いにくくなるかもしれないですが…早くダンパーを作らないと、これ以上の進化は望めないかも。目指すは、油と空気によるアクティブサスペンションか、トーションビーム式サスペンションです！コイル式スプリングも必要ですね。

この客車も、重くなってしまうので馬を二頭立ではなく、四頭立で引いてます。

今後は、軽量化が課題になるかもしれないですね…骨格の肉抜きとか、外装の樹脂化を検討しましょう。重くなったらから動力を増強するでは、コストが掛かり過ぎると思いますので。

内燃機関や電力による動力は、利便性や環境に与える影響が分からない上に小型化が難しいと思いますので却下です。

今サンプルとして使えるのが、ゼロ戦の周辺機器ですから、規模が大き過ぎるのです。

利点としては、錬金で型を作り、平民を使い鑄造で大量生産や固定化の魔法でエンジンオイルを省く、メンテナンスフリーにする、理想の空燃比で燃焼させて究極の効率を狙えるのは、大きいアドバン

テージですが、ヴァンケルさんやダイムラーさん、ポルシェさんが居ないと実用化出来そうに有りません。なによりも電子制御のシステムが作れない！

それ等を考えずに使わなくてはならない分野…例えば軍事、海運…は、あるのですが、人が移動する為には使いたく無いと言うのが、本音です。

ただし、船に使うというのなら別ですよ。少しでも遠洋に行けるなら、蟹や鱈が取れるかもしれないのです！鱈が取れば、すけそうだらならば、タラノコが作れる！たらこスパゲティが食べられるかもしれないのです。ロマリアあたりには、からすみがあるかもしれないけど、つぶつぶ感はタラコが最高なのです！せっかくマヨネーズがあるので、マグロも欲しいですね。ツナマヨが食べたい！たらこマヨネーズやエビマヨも！ああ、痛風にならない様に気をつけなくてはなりませんね。

それら以外は、幻獣というファンタジーな存在が居るなら、環境に優しい方が良くに決まっています。

そうは言っても、動物達が出す糞からメタンとかが排出される事を考えると、分らない部分は沢山有ります。メタンは、有効に利用したいと考えていて、いくつか候補がありますが、ガスとして使いたい…匂いは、パイプラインを作り、ガスを供給してやれば解決するので、やっぱりお風呂でしょう。常にかけ流しのお湯なんて贅沢な感じがして、貴族好みな存在になるでしょう？そこに、美味しい食べ物と綺麗な景色を組み合わせれば、観光地として成り立つはず…ラグドリアン湖の近くと、海の近くに作ってみたいと思います。

今回のお出かけは、海側の施設をどこにするか視察するのが目的です。

しかし、アイディアを持つのが私しか居ないとは言えど、どこかの北の將軍さまか？という位、技術指導で出歩いているのも問題ですね。アカデミーを使いたいのですが、魔法一辺倒になる為に使えないのです。技術と魔法のハイブリッドで考えてみなければ、全員が

幸せになれないのですから。

さて、海辺の村に着きました。

最近、白身魚の干物が名産になり、すこし人も増えたようです。以前は、自分たちが食べる以外は使い道が無かったサカナも名産になっていたので、びつくりしたようです。骨が少なくて身離れのよい舌平目が珍重されていたのが、ほっけ等も美味しい事が貴族の間で広まったのが要因ですね。

ただし、アジや鰯が取れても、すぐに駄目になってしまふのが今の課題だそうです。干物にしても白身魚に比べると骨が多くて食べにくいのも。鰯は解決するのは簡単に出来るのですが、問題はアジです。干物を三枚卸で作って食用油をスプレーすれば、トロのように脂が乗ったのには出来ます。骨も味を出してくれると思うのは、日本人ならではの感覚ではないのでしょうか？ナイフフォークで食べづらいのも一因ですけど。前に姉様やルイズにアジの干物を食べて貰いましたが、苦勞してましたからね。加工せずに生で流通させられないし。どうしようかな？

鰯は、内臓を取って丸のまま軽く塩漬けにしたあと、オイルに漬けてオイルサーディン、三枚にしたあとじっくり塩漬けにしてからオイルに漬けて、アンチョビになりました。瓶詰にすれば、長持ちしやすいので問題は解決です。

後日の話ですが、塩漬けの鰯が発酵して、魚醬が出来ました。醤油より香りが強く、少し使いにくいのが難点ですが、また一つ日本食が近づいて来ました。

アジに関してですが、塩漬けせずにオイル漬けにし、ハーブをいれて瓶詰にしました。その際に、湯せんで加熱することにより、おいしは解決しました。主な食べ方としては、フリッター、ムニエルです。大量に取れる為に、安価で流通することになりました。これでDHAも取れるようになりました。次は、鰯でカズノコかな？

お風呂の設営場所ですが、基本は、川の近くになりました。今回は、候補を幾つか見つけるのが目的でしたから、良しとしましょう。

帰った途端に、姉様が飛んで来て「フオルが、約束を忘れて一人で出かけた」と拗ねて、ご機嫌を取る為に、しばらく何をするにも一緒になっちゃったのは、別のお話。

私の工業考察？とお魚。（後書き）

アジの干物の原料がオランダ産だったりした事から生まれた話。
内燃機関の所で出て来た人の名前は、ドイツの方ばかりですね… ち
よつと反省しています。ポルシェさんやダイムラーさんはメーカー
ですが、ヴァンケルさんは、ロータリーエンジンの基礎理論を出し
た人です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216q/>

王族に転生？

2011年3月6日16時13分発行